

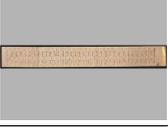
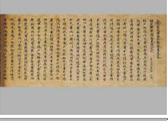
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝(建造物)	浄土寺多宝塔	じょうどしたほうとう	1基	尾道市東久保町	明34.3.27 昭28.3.31(国宝指定)	三間多宝塔、本瓦葺		鎌倉時代末期、嘉暦3年(1328)建立。大日如来及び脇侍(わきじ)(尾道市重要文化財)を安置し、内部には彩色が施され、壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。 多宝塔としては、規模が大きい上に全体のつりあいがよく、高野山金剛三昧院や石山寺の多宝塔と並ぶすぐれた塔である。牡丹・唐草に楕圓の影射した蓋版(かえるまた)など、華麗な裝飾に高み、その登った窓窓及び手法によって、鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年の解体修理で、屋根の上の相輪(そうりん)の中から経巻など多くの納入品が発見された。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	浄土寺本堂 附厨子1基 棟札2枚 浄土寺境内図2枚	じょうどしほんどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14 昭28.3.31(国宝指定)	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、 向背一間、本瓦葺 棟札 2枚(嘉暦二年四月十一日、正徳二年四月十一日各1枚)		浄土寺は、鎌倉時代末期(14世紀初め)に築かれたが、尾道の人々によって、数年後には再建された。この本堂も尾道の入母屋(しゃみ)運蓮(どうれん)、比丘尼(びくに)造性(どうしやう)が発願して、鎌倉時代の嘉暦2年(1327)に大工藤原友国、向国員により建築されたものである。前面二間通りを外陣とし、うしろを内陣とする密教が平面である。和様を基調としているが、柱唐戸(さんからど)、花肘木(はなひじき)、二斗などを用いたいわゆる折衷様式である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	向上寺三重塔	こうじょうさんじゅうのとう	1基	尾道市瀬戸田町	大2.4.14 昭33.2.8(国宝指定)	三間三重塔婆、本瓦葺、高さ19m		室町時代・永享4年(1432)建立の塔。信元・信昌を権部として建立された。全体に和様を基調とするが、各窓の扉木を唐様木(おうたるとまき)とし、花頭窓(かとうまど)を八つ割りなど、細部にかなり唐様に唐様木(おうたるとまき)を取り入れられている。肘木鼻(ひじまばな)やすみ木持ち送り彫刻なども巧みに作られ、扉木木下絵棟肘木(おたるええようひじき)の先端は全部彫刻を施し、かつ彩色を施した納網(なうま)豪華なものである。 向上寺は瀬戸田港北側、瀬戸田水道を一望できる小高い丘の上にある。室町時代(1333～1572)に始まる神宗寺院で、小早川氏一族である生口氏と深い関係を持っていた。		
国	国宝(絵画)	絹本着色普賢延命像 画絹裏に「延命像仁平三年四月廿一日供養」の 墨書がある	けんぼんしやくしやくふげんえんみやうぞう	1幅	尾道市西土堂町	昭42.6.15 昭43.4.25(名称変更) 昭90.6.12(国宝指定)	二十臂像で四白象にのり各象首には四天王を頂く形式	縦146cm、横85cm	平安時代後期の仁平3年(1153)の作。本品は二十臂(ひ)延命像としては最古の作品であり、描写の上でも像の尊厳や二十臂をかたどるゆみない末縁、強い眼(まどろ)、大ぶる彩色文様に加えて、象頂の四支玉に見られる力強い動物の表現など、鎌倉時代(1192～1332)に見られる画面に近い特色を持つ。時代様式の変遷を知るうえで貴重であり、他の作品の年代決定にあたって基準となる作品である。 ※普賢延命…特に延命功徳とする普賢菩薩像。腕が2本のもの、20本の腕を持つ二十臂延命像がある。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺阿弥陀堂	じょうどしあみだどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14	桁行五間、梁間四間、一重、寄棟造、本瓦葺		浄土寺本堂(国宝)の東隣に立つこの建物は、南北朝時代、康永4年(貞和元、1345)再建と伝えられる。本堂、多宝塔(国宝)が再建された後に建てられたものと思われる。復れた和様建築と評価されている。本尊は阿弥陀如来坐像(県文文)である。 浄土寺は尾道津和野の古刹(こさつ)で、尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代(1192～1332)以後、西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西国寺金堂 附 厨子 1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大2.4.14	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、 向背一間、本瓦葺		西国寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹(こさつ)である。 金堂は、室徳3年(1386)建立で、和様を基調とした建物である。前柱上二手先で蛇腹支輪及び小天井付し、向拝(こうはい)は三斗組である。それに虹梁(こうりやう)が掛けられ中供(なかそなえ)に蓋版(かえるまた)があり、虹梁の柱外には拳鼻(こぶしばな)が、また主屋の方へは手探(たばさみ)が出て威威が示されている。入母造(いりもやつり)の妻飾(つまかざり)は二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりやうたばさみ)で、屋根に三重窓があり、規模社大で手法雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子(ずし)、須弥壇(じゆみだん)も秀麗である。本道楽師如来坐像(県文)が本尊である。		
国	重要文化財(建造物)	西国寺三重塔	さいこくじさんじゅうのとう	1基	尾道市西久保町	大2.4.14	三間三重塔婆、本瓦葺		この三重塔は、永享元年(1429)足利義隆によって建立された。室町時代(1333～1572)によく行われた復古建築の範疇で、和様と禅宗様の混交の風に見えつつ、奈良時代(710～794)への復帰をめざしたものである。どっしりとした美しい塔で、回縁がなく、石製基礎の上に立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財(建造物)	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうさんじゅうのとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭24.2.25	石造、花こう岩製		この塔は、鎌倉時代、永仁2年(1294)建立であり、基壇に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性(にんじやう)が建てたと伝えられ、基壇には作者のみ阿のなもみ入る白雲、力強い反りを示し、初層四面の仏の種子(しじ)は薬研(やげん)彫り、雄健な鎌倉時代(1192～1332)の代表的な作品である。光明坊は、生口島南岸のほぼ中央にある、真言宗の古刹(こさつ)である。		
国	重要文化財(建造物)	天寧寺塔婆 附 銘札 1枚	てんないじどうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆(元五重)、本瓦葺		天寧寺は貞治6年(1367)に足利義隆が建て、普明国師を開山とした曹洞宗の大本寺である。のち本堂などは雷火で焼失し、この塔だけが残った。 塔婆は嘉慶2年(1388)の造立で、元禄5年(1692)の上二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当初のものをよく伝えており、和様を基調に禅宗様が濃厚にとり入れられ、規模雄大で手法もまたすぐれている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	浄土寺納経塔	じょうどじのうきょうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造、宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年(1278)10月、尾道の富商・光阿弥陀仏のために、子息の光阿吉近(こうあよしちか)が建てた供養塔。光阿弥陀仏は、浄土寺が定礎(じょうじょう)によって再興される以前に、現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。 塔身に胎藏界四仏の種子をきざみ、法華経・浄土三部経・梵網経(ぼんもうきょう)などを奉納したものである。基礎に格狭間(こうざま)をつけ、塔身の上に高欄を設けるなど整備した形を示すが、笠の上に露盤をおき誦花・宝珠にしてあることは古訓で、大きい基壇とあいまって重厚豪快な感じがする。鎌倉時代(1192～1332)の石造宝塔の中では年代が古く、形態もよく整った優品である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修(ぎやくしゆ)や光孝らの追善のため、南北朝時代の貞和4年(1348)10月1日に建立された。 みことな格狭間(こうざま)つきの基礎の上を美しい反花(かえりばな)とし、金剛界四仏の種子をきざんだ塔身を安置し、突起には八方天を種子で現している。格狭間には造立の趣旨が刻まれている。 基礎と塔身の間に受台を入れているとは、伊予や備後南部の宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺山門附 棟札 1枚	じょうどじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11(県指定) 昭28.11.14 平6.7.12(露滴庵(附中門)分割)	四脚門、切妻造、本瓦葺、両袖潜付		浄土寺の表門で、南北朝時代(1333～1392)に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手になったのか、本堂向拝の軒の規矩と同じ規矩をもつとは、あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板蓋股(かえるまた)に足利氏の家紋である「二引門」が表されている。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり、「足利尊氏の墓」と称されている。 非常に洗練された姿で、各部分の形成つりあいよくれた引き締まった堅実な姿である。最下層の反花座(かえりばなざ)にある複合の蓮弁及び基礎側面の格狭間(こうざま)は大きくこどである。塔身には金剛界四仏を種子(しじ)で配し、笠の隅飾はやや外にかたむき、二弧の内側に八方天の種子をあらわしている。 相輪を完備した、南北朝時代(1333～1392)における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西郷寺本堂	さいこうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間、梁間八間、寄棟造、本瓦葺		南北朝時代の文和2年(1353)に二代目住持の託阿(たくあ)が発願して造られた建造物である。角柱上に舟肘木を置くだけの簡素な形式であるが、方三間の内陣の周囲を外陣がめぐめる形式の平面は浄土教に特徴的で、時宗本堂長吉の遺構として貴重である。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一棟によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。語念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	西郷寺山門	さいこうじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	檼門、本瓦葺		室町時代の貞治年間(1362～68)の建築で、板蓋股(かえるまた)や破風などに室町時代の様式がみられる。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一棟によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。語念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	吉原家住宅 主屋(附便所1棟) 1棟 納屋(附棟札1枚) 1棟 附鎮守社 1棟 家相圖 5棟	よしはらげじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30(県指定) 平3.5.31	主屋/桁行20.1m、梁間9.1m、寄棟造、茅葺、西面下屋附属、本瓦葺 納屋/桁行9.9m、梁間4.0m、切妻造、本瓦葺 鎮守社/一間社流見世棚造、鉄板葺		向島の豪農であった吉原家の住宅で、同家に伝わる祈禱札などから江戸時代、寛永12年(1635)の建築と思われる。規模の大きい整形六間取りに土間に持ち式台の痕跡もたどる建物である。土間の中央には柱を建て、二重の梁組で大きな空間を構成しており、当時としてはかなり上等な構造である。土間筋に建具はなく、ごく初期の段階では土間に格子(こうし)戸や格子窓、その上部に小壁も無い時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていると思われる。瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺 方丈 1棟 唐門 1棟 庫裏及び客殿 1棟 宝庫 1棟 裏門 1棟 露滴庵 1棟 附中門 1棟 棟札 2枚 旧食堂厨子及び須弥壇 1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26(県指定) 平6.7.12	方丈/桁行16.0m、梁間13.0m、一重、寄棟造、本瓦葺 唐門/一間向い唐門、本瓦葺 庫裏及び客殿/角屋付き庫裏と客殿の複合建築、切妻造、本瓦葺 宝庫/土蔵造、桁行6.0m、梁間3.9m、二階建、切妻造、本瓦葺 裏門/長屋門、桁行14.9m、梁間5.0m、切妻造、本瓦葺 露滴庵/三層台目茶室、水屋及び四層・四重半の勝手よりなる、一重、入母屋造、茅葺		浄土寺は鎌倉時代(1192～1332)に始まり、尾道を代表する古刹(こさつ)の一つである。境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。 庫裏(ぐら)及び客殿は享保4年(1719)建立。方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。 露滴庵(ろうてきあん)は、三層台目の唐に水屋と後補の勝手を付属させた茶室である。豊田秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝え、文化11年(1814)向島の天満屋が浄土寺に寄進したという。いっゆる織部(おりべ)好みの風格のある建物である。 唐門は総檜や千作の小さな一間の向唐門で正徳2年(1712)建築。宝庫は二階建て土蔵で、宝暦9年(1759)建築。裏門は長屋門で18世紀後期の建築である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	常称寺 本堂1棟 観音堂1棟 鐘撞堂1棟 大門1棟 附 基廻門1棟	じょうしょうじ ほんどう かんのんどう かねつぎどう だいまん	4棟	尾道市西久保町	平19.12.4	本堂 桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺 観音堂 桁行三間、梁間三間、一重、宝形造。 向拝一間、本瓦葺 鐘撞堂 桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、本瓦葺 大門 四脚門、切妻造、本瓦葺 附 基廻門 一間薬師門、本瓦葺		常称寺は、鎌倉時代後期の正応年間(1288～93年)に、時宗二代・真教によって創建されたと伝えられる寺院である。本堂は室町中期、観音堂は室町後期、鐘撞堂は江戸前期、大門は室町前期の建築とみられる。それぞれの建物は、後世の改造を受けながらも多くの当初材を残しており、往時の姿をよく伝えている。 本堂は、外観を和様、内部構成を禅宗とし、内陣・外陣と隔障を一体的空間とするなど、中世時宗本堂の特徴をよく表している。また大門は、現存する常称寺の建造物のなかでは最も古く、その重厚な構えは当時の寺格の高さを体現している。観音堂や鐘撞堂も、各時代の尾道周辺地域の意匠的特徴を備えており、当地域における建築文化の経路を示す貴重な遺構である。 中世時宗寺院は全国的に遺存例が少なく、そのなかでも室町時代の遺構が3棟も残っている例は希少である。また、室町前期から江戸前期にわたって建てられた鐘撞堂は、それぞれ時代的・地域的特徴をよく備えており、時宗寺院の伽藍構成の歴史的展開を理解する上で、学術的な価値が高い。		関連施設:おのみち歴史博物館(0848-37-6555)
国	重要文化財(建造物)	旧大浜埼通航海流信号所施設 通航信号塔 昼間潮流信号機 夜間潮流信号機(大浜埼灯台) 附・欄干(上段・下段) 検潮器浪除塔 附・旗竿 石堰(上段・中段・下段)	きゅうおおはまきつこうしょうりゅう うしんこうしよせつ つうこうしんこう ひるまちりゅうしんこうき やかんちりゅうしんこうとう(お おはまきつうたい) けんちりゅうきなみよけとう	1棟3基	尾道市因島大浜町	令和6年(2024)8月15日			瀬戸内海の狭水道、布礼瀬戸に面した因島の北東端に位置する。航行船舶に交通状況や潮流の方向を告知するため設置した通航潮流信号所施設。明治43年の設置時に、通航信号塔及び昼間潮流信号機、検潮器浪除塔を新築し、同27年建設の灯台を転用して夜間潮流信号塔とした。通航信号塔は屋根上につづの角塔を並べ、木板で〇△□の記号を表示して対向船舶の位置を知らせた。現存唯一の木造信号塔として貴重。夜間潮流信号塔は信号所の廃止後、灯台として再度点灯した。近代交通機関の主要な施設が集約された本施設は、船舶の安全航行を支えた施設群として近代海上交通史上、価値が高い。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぼんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明45.2.8	絹本、八相涅槃図	縦152.4cm、横140.7cm	涅槃図は、釈迦の入滅つまり涅槃の態様を描いた図で、涅槃会(ねはんえ)の本尊として用いられるため、遺品は11世紀からあり鳥獣の数が次第に増加しその形状も横長構図から縦長構図に推移している。 本品は、ほぼ正方形の形状をした鎌倉時代、13世紀中頃の作である。元は大坂の神峯山寺に伝来したとされている。 八相涅槃図と称され、釈尊のこの世における主要な事跡八種を入涅槃を中心に構成した図である。浄土寺本(重文)では八相を別の区画の中に描いているが、この図では区画を設けず配置しており、明恵上人作の涅槃講式の説と一致し、宋、元の涅槃図の影響を受けて成立したと推定される。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	紙本着色三十六歌仙切 佐竹家伝来	しほんちやくしよくさんじゅうろっかせ んぎれ	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.5.6	紙本、幅仕立	縦35.5cm、横78.2cm	鎌倉時代(1192～1332)に流行した歌仙絵巻の一部分である。元来上下2巻であったが、京都賀茂神社から佐竹家に移管された際、1人ずつ切りはなし掛軸仕立とした。題名中にも最も傑出したもので、書は京極良経(きょうごくよりつね)、絵は藤原信実(ふじわらののぶざね)の筆になると伝えられる。 本寺所蔵の貫之(つらゆきの)書部分は、室町時代(1333～1572)に補筆されたものである。 三十六歌仙とは、平安時代中期(10世紀末)に藤原公任が選んだとされる代表的歌人36人のことである。 ※藤原信実(1177～?)…鎌倉時代の絵師・歌人 ※紀貫之(868?～945?)…平安時代初期の歌人		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色千手千眼観音像	けんぼんちやくしよくせんじゆせんが んかんのんぞう	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭35.6.9	絹本着色	縦124cm、横54cm	鎌倉時代(1192～1332)の作。千手観音の像のほとんど唯一といわれてよい実例で、正座に千臂(〇)千眼が描かれている。おそらく鎌倉時代初期、13世紀に日本列島にもたらされた中国の宋代の原本を、忠実に模写したものであろうかと思われる。筆法の厳格さと構図の巧妙さは類例のないすぐれた作品と言える。 千手観音の平とは無量と円満の意味であり、その造像にあたっては、十八や十四に略して造られ、千手の実例は唐招提寺に見られるのみである。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図 左右下の各縁に涅槃の諸相がある 附 旧軸木 1本 文永十一年粉河寺僧隨覚房云々の記がある	けんぼんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市東久保町	昭43.4.25		縦174.5cm、横133.5cm	鎌倉時代、文永11年(1274)製作。 本図のように涅槃に関係の深い多くの説話を図のまわりに廻らしている例は少ない。図の左側八段には主として入涅槃の事象を、右側には涅槃後摩耶夫人に対する再生説法場面を中心に描いている。 本図は古典的涅槃図の構成を脱して次第に数多くの寓載を描きこむ過程を示している点にも注目され、人物描写にも新派(しんぱ)の宋面の筆(ぼし)どりを用いている。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(絵画)	紙本白描遊行上人絵 巻第二、第五、第六、第八	しほんはくびやうぎしょうしやうにん え	4巻	尾道市西久保町	昭53.6.15	巻第二/本紙々纏24枚、詞4段、絵4段 巻第五/ 巻第六/本紙々纏19枚、詞4段、絵3段 巻第六/本紙々纏17枚、詞2段、絵1段 巻第八/本紙々纏24枚、詞8段、絵3段	縦30.2cm 長巻/巻第二1,070.5cm、第五920.0cm、第六861.5cm、第八1,202.0cm	南北朝時代(1333～1392)の頃の作と考えられる。 時宗の一筆の白描の伝記絵巻は、聖徳太子の「聖徳太子十二巻」と宗像館「遊行上人絵十巻」の二系統が伝わっているが、本品は一筆と他師の伝記を合わせた宗像系群。全巻白描の画法による珍しい絵巻である。特に、技法として新しく渡来した水彩画の手法と大和絵との融合をはかった画風は独特である。 ※白描…絵の技法の一つ。墨線と墨の濃淡で表現する。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色罔界曼荼羅図 附 旧軸木 2本 文保元年二月益円の絵がある	けんぼんちやくしよくりやうかいまんだら ず	2幅	尾道市東久保町	昭53.6.15	胎藏界/縦263.0cm、横183.5cm 金剛界/縦251.0cm、横185.0cm 旧軸木/軸長各184.0cm、軸径各5.0cm		鎌倉時代の文保元年(1317)の作。 罔界曼荼羅図で、描写は伝統的な手法により、重厚な筆致と鮮やかな彩色で、きわめて精緻に描かれている。諸尊像には補筆や補彩がなく、描表具や八双金具は当初のもので、軸木に墨書で「文保元年丁巳二月四日」の銘がある。 当時の彫像遺物の彫影を伝える貴重な資料である。鎌倉時代末期の仏画で年紀のあるものが少ないことから考えると、制作年代が明確で、基準作例としての価値は大きい。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりやう ぞう	1躯	尾道市東久保町	明32.8.1	檜材、一木造	像高1.6m	浄土寺本堂の本尊で、定証起請文(じょうしょうきしょうもん)にある「本尊聖徳太子御作等身皆金色十一面観音像」と記されているのは、おそらく本像のことである。 檜材のものは、右手は熊無畏(くまむい)の印を、左手に開敷蓮華をさした花瓶(後補)をもつ。面相は豊満で、体軀は肥大充実し、刀法も鋭く、全身を金色の袈衣に色染めた増城の尊容の像である。平安時代も初期に近い頃(9世紀)のすぐれた作である。		33年に一度開帳 関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)

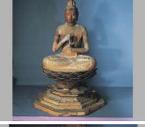
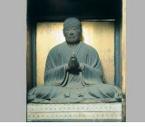
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像(伝安阿弥作)	もくぞうしゃかによらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造、素木、玉眼	像高78cm	西園寺客殿脇間に安置されている仏像で、小柄ながらも秀麗な面容に、よく調和のとれた彫りの深い流れのような衣文のせいで、鎌倉時代(1192～1332)の安阿弥流の特色がうかがわれる。寺伝によると、本像は快慶の作とされ、かつてはうしろ坂の釈迦堂の本尊であったが、御堂の炎上後、西園寺に安置することになったという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm、膝張71cm	平安時代も初期に近い時期(9世紀)の秀作である。西園寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で、古来秘仏として伝来してきたものである。優雅ながらも荘厳にして荘重な趣をたえた、重量感のある仏像で、螺髪(らぼう)は切付けて、彩色のない素木の古い高雅さが感ぜられる。寺伝によると、讃岐普通寺(せんづうじ)から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのりゅうぞう	1躯	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代(794～1191)の作。千手観音で真数千手のものは数点しかなく、ほとんどが合掌手、宝鉢手に他に両脇に十九本の脇手がある四十二臂(じに)像がごく一般的である。本像も四十二臂像で、彩色は剥落しているが、かえって本目が美しく効果的にあらわれている。寺伝では行基菩薩作とされ、向島余崎城主村上水軍の将鳥居資長が寄進したものと伝え、その念持仏として船中に護持し、風浪を凌いだので、「浪文観音」の俗称もある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置) 乾元二年/銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造、玉眼、彩色、髪をみづらに結い、柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年(1303)、沙弥定証(じょうじょう)が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京の院派の仏師・院堂が作った。「孝養像」と称されるもので、玉眼で彩色され、髪はみづらに結い、両手で柄香炉(えごろう)を持った姿である。胎内頭部に「乾元二年法印院堂作」という墨書がある。定証起請文(じょうじょうきしょうもん)に「聖徳太子十六歳御鉢、京都仏師印堂作」というのは本像と思われる。文相と銘文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)院派の佳作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置)	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造、玉眼、彩色、左手に柄香炉、右手に笏を持つ。	像高135cm	南北朝時代、暦応2年(1339)の作で、胎内に墨書銘がある。「撰政(せんせい)像」と称せられるもので、玉眼で彩色されている。撰政像は必ず笏(しゃく)を両手で持っているものであるが、本像は左手に柄香炉(えごろう)、右手に笏を持っており、撰政像の影響を受けた孝養像の一変形と思われる。同様のものは南北朝時代(1333～1392)前後からその例があらわされる。同種の太子像中の秀作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかによらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	本体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期、9世紀の作と思われる作品で、当時の造像によく見られる本体と台座を榿(かや)の一木から彫り出した、重厚荘厳な仏像である。もと伊勢神宮の神宮寺にあつたものという。釈迦牟尼(むに)とは「釈迦族の聖者」の意味で、苦行の後には雨りを得て慈悲と智慧(ちえ)により衆生(しゅうじょう)を済度(さいど)した仏教の祖である。その釈尊は久遠常在(くおんじょうじょう)の仏である釈迦如来として多くの経典の教主とされており、日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町御寺	昭38.17	寄木造、漆箔、玉眼	像高83cm	真言宗光明坊の本尊で、漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結びこの仏像は、鎌倉時代(1192～1332)の作ではあるが、面相は丸味があつており、衣文の緩みやわらかく、平安風の匂いを感じさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造浄土曼荼羅刻出龕	もくぞうじょうとまんだらくしゅつがふん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	榿木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm、横14cm、奥行4cm	龕(がん)とは、本来は塔の下の室という意味で、厨子状に刻(く)られたくぼみの中に納められた像を龕像という。小型のものは諸国を巡る僧侶が携帯していた例が多い。この龕は榿木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一木から宝楼閣や七宝の池などに、弥陀三尊をはじめ、十大弟子、二十五菩薩、四天、二力士など五十以上の諸尊や鳳首の舟などを克明に彫り起して極楽浄土を表現しており、すぐれた技法による精巧で構成の巧みな作品である。平安時代、12世紀の作。厨子の裏面に「高野山無量寿院廻通」の朱漆銘がある。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(南無仏太子像) 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう(なむたいざぞう)	1軀	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造、玉眼、彩色	像高68cm	南北朝時代、建武5年(1337)の作。胎内頭部に「建武五年十月二十四日院勢作」の墨書銘がある。「南無仏の姿」と称されるもので、玉眼入りの彩色された像である。三尊の尊像と音む。上半身は球形で下半身に髯の姿を着け合掌する姿である。同じ胎内から出た三尊仏の印(いんぶつ)には、本寺重修に尽力した道運、道性の名も見られ、本寺と太子信仰の関係も察せられる貴重な作品である。なお、作者の院勢は、孝養像の作者院堂と同じ京都院派の著名な仏師である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来坐立像 像内二藤原行光ノ願文及名号等ヲ納ム	もくぞうあみだにょらいりゅうどう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造、漆箔	像高60cm	鎌倉時代、天福元年(1233)の作。小像ではあるが、漆箔の上に精緻な鍍金(きりがね)を施した秀麗な安阿弥流のおだやかな作品で、胎内の空室を金箔ではつめた珍しい例の仏像である。その胎内には承久元年(1219)に卒した藤原行光の自筆文書と千字の番号及び願文が納入されていた。願文には天福元年の年紀があり、本像は、行光の十五回忌にその冥福を祈るために造られたものであることがわかる。行光は源頼朝、義朝の縁につながる人物で、民部丞、政所執事、信濃守などの要職にあつた。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうどう	1躯	尾道市梶山田甲	昭24.2.18	一木造、上下二段の背割りがある、素木	像高190cm	平安時代(794~1191)の作。摩阿衍(まかえん)寺の本尊で、冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し、彫刻の像は、柔順(じょうはく)をつけ腕鎖(わんせん)を彫り出している。すこぶる重量感のある堂々とした像であるが、天衣や裳の彫は比較的浅い。背面の胸背部と腕部に内割(うちわり)があるが、その納入品についての寄託はない。この像は、たびたび災禍にあつたためか、彩色はほとんど剥落し、化仏、手足や天衣の先端は欠失し、現存のそれらは後補である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造仏涅槃像	もくぞうぶつねはんぞう	1躯	尾道市御調町市	昭24.2.18	寄木造、漆箔、玉眼	像高150cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。涅槃とは、一切煩惱の断絶を脱して迷界に再生する業因を滅却した境地と言われ、釈迦の死の時を言う。釈迦が沙羅双樹(さらそうじゆ)の下で右脇を下にして横臥し、その周囲をとりまいて、釈迦の弟子の僧達や俗人から見入、人物が悲嘆し痛哭している有様を描いた涅槃図は多いが、技術的にみづかしい彫刻は少ない。本像は玉眼入り漆箔の等身大の数少ない涅槃像のひとつである。「塚原道」とも俗称されるこの像の現存する最古のものは、法隆寺五重塔の初重四面の涅槃群で白鳳時代(8世紀)、奈良明日香村の岡寺のもは天平時代(8世紀中葉)、他には本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来坐像 像内に巧匠安阿弥陀仏、伊豆御山常行常御仏、建仁元年十月口日の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造、漆箔、裳懸座にのる	像高74.0cm	漆箔で裳懸座(もかけざ)に坐るこの像は、銘文にあるようにもとは伊豆山権現(走湯山、神奈川県)常行堂の本尊であったもので、鎌倉時代、建仁元年(1201)快慶(安阿弥、あんなみ)の若い時代の作品である。形を整った安阿弥流のおだやかな作風のもので、宝冠をつけた、阿弥陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造観音菩薩立像 附 木造観音菩薩立像 1 軀	もくぞうかんのんぼさつりゅうどう	1 軀	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一木彫像で、肩幅広く重量感豊かな体軀や翻波(ほんば)風の衣文には平安時代初期(9世紀)の余風を伝えるはいるが、総体におだやかさが顕著になっており、10世紀の製作と考えられる。堂々とした風格があり、保存も比較的良く、備前地方の平安古像を代表するすぐれた作品である。付(つけたり)の菩薩像は本品と一軸に伝世したものであるが、作柄に地方風が強く、この地方の造像傾向の変遷の一端をつかう遺作として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財(工芸品)	銅製五鈴鉢(伝僧空海傳來)	どうせいごこい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm、口径5.5cm	五鈴鉢は金剛鉢と総称されるもの一つで、密教修法の時、諸尊を冥覚歡喜させ、眠っている仏心呼びさすために用いられる。本品は鈴身に仏像を鑄出した五鈴仏像鉢で、その仏像の種類によって梵天帝釈四天鈴(ほんてんたいしやくてんれい)と称されるものである。把柄(つかえ)は蓮華をかたどり、五鈴は獅子の爪の形をした精巧な細工の逸品で、寺伝に弘法大師傳來といふ晩唐期(9世紀頃)の作品である。		
国	重要文化財(工芸品)	鐺杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	鐺杖は有聲杖ともいわれ、頭部の輪形に遊環(ゆうかん)を通し、これを揺って音を出すものである。鐺杖の由来は仏教初伝の頃と言われ、長さは等身丈で、竿の取付杖として用いられていたが、後には柄を短くして手鐺杖とよばれ、杖としてはなく法東の時の梵音具として用いられるようになった。この鐺杖も「手鐺杖」で、双毫の頭に蓮華をさした花瓶をおき、毫尾で鐺杖の輪をかたどり、頂上に定印(じょういん)の三尊仏を配し、朱色の短い杖をつけた精巧な品である。寺伝では弘法大師傳來といふ晩唐(9世紀ごろ)の作である。		
国	重要文化財(工芸品)	唐花窟龕八種鏡	とうかえんおちはちりゅうきょう	1面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は、伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので、花芯座とも言うべき座が鈕の周囲にあり、内外区の界隈もあるが、内外の文様は同一系統であるので自由に連絡している。窟龕(くつこん)の鏡(おしどり)と唐花は相対しており、その座は優美流麗で、鍔杖(つらづき)も非常にすぐれており、保存も完好な鎌倉時代(1192~1332)における和鏡の逸品である。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文沈金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禪正明慶寺前宋家造」外底に「蓮文三年六月日」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm、横22cm、高さ25cm	中国南部の杭州で、元の延祐2年(1315)に製作された箱である。その後、日本に輸入され、南北朝時代の延文3年(1358)には浄土寺で嚴勝王経の箱とされた。内部に朱漆、外面に黒漆をほどこし、孔雀文が彫られている。蓋に「首」、身に「性」の文字が彫られ、蓋裏に「延祐二年云々」の黒漆銘、外底に「唐後國尾道云々」の朱漆銘がある。元からの舶来品で、製作年代、製作地、製作者が明らかでない中国漆芸史上の貴重な逸品で、製作年の明確された8411合(日本では沈金と呼ばれる技術)作品としては最古のものである。光明坊(豊田郡瀬戸田町)のもの姉妹品で、大きさ及び銘文はほとんど同じである。また、浄土寺の孔雀文沈金経箱とは大きさは違いますが、意匠などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	孔雀舎文金経箱 裏面に「延祐二年棟梁禪正杭州油局橋金家造」 内底に「延祐二年棟梁禪正」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高さ25.2cm、縦39.8cm、横23.3cm	浄土寺(尾道市)旧蔵のもので、浄土寺にある「孔雀舎文金経箱」(重文)「孔雀[84a1]金経箱」(重文)の二合とは姉妹品で、特に後者とは大きき及び銘文はほとんど同じである。黒漆塗の面に孔雀と宝相華(ほうそうげ)の文様をきわめて精緻に[84a1]金彫りした精巧な船載の工芸品で、刀技は単純鋭利、形態は素雅な元時代(1271~1368)の漆工の名品である。延祐2年(1315)銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財(工芸品)	銅水瓶	どうすいびょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm、胴径13.7cm	水瓶は、もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが、供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。この水瓶は、獅子のつまみのある蓋がついた鎌倉時代(1192~1332)の作で、志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太首で、肩に水平の面取りを作り、長い注口と把手をつけるという形をしている。この形態の水瓶は法会の時の湯(く)瓶に用いられることもある。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	金銅五鈷鈴 附 金銅五鈷杵 1口 金剛金剛盤 1面	こんどうごくれい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製、鋳造品	五鈷鈴/高さ21.5cm、口径8.8cm 五鈷杵/長さ19.6cm 金剛盤/長さ26.1cm	この五鈷鈴は、中帯に輪室文を、肩帯に独鈷、口帯に三鈷を鑄出している珍しい作で、精緻な細工を施した形勢の美しい鈴である。五鈷杵・金剛盤とともに一具として伝存する鎌倉時代初期(12世紀末~13世紀初め)の製作である。寺伝によると、この一具は白河法皇から西園寺中興の権臣はんに下贈されたものとされている。		
国	重要文化財(工芸品)	孔雀舎文金経箱	くじゃくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm、横36cm、高さ29cm	尾道浄土寺に伝わる元の時代(1271~1368)の作品で、延祐2年(1315)銘の浄土寺所有孔雀[84a1]金(くじゃくそうきん)経箱や光明坊所有孔雀[84a1]金経箱と意匠がほとんど同じことから、同時代に製作されたと推定される。 印刷屋造りで、裏表には黒漆塗を施し、身の長側に双孔雀、短側面には双尾長鳥文、蓋の側面には唐花文をそれぞれ沈金で埋めつけ、蓋の正面に「天」、身の四隅に「性・静・情・造」の文字を薬研彫にしている。蓋と身の内部は未漆である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書観世音法華和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしよかんぜおんほうらうわか	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙、紺紙金泥		足利尊氏は建武政府に反して間もなく九州に敗走したが、その途中浄土寺に船を寄せて本尊の観世音菩薩に戦運挽回の祈願をしている。その後数ヶ月で勢を回復した足利尊氏が上洛の途中の建武3年(1336)5月5日、再び浄土寺観音堂に参詣した時、尊氏と弟の直義等6人が本尊十一面観音菩薩の前で、観音真印の和歌33首を詠じて宝前に供したものである。この中に尊氏の詠歌は7首で、巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書定証記講文 嘉元四年トアリ 附 同家文(残簡)1通	しほんぼくしよじょうきょうきしよもん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の交書、紺紙金泥	縦27.5cm、横67cm	鎌倉時代の嘉元4年(1306)、真言律宗の西大寺観尊(1201~1290)の弟子定証が浄土寺の伽藍を再建した時の自筆起講文である。 定証以前の浄土寺は紀州高野山に所属し、尾道の入光阿弥陀仏の外護によって本堂・五重塔・多宝塔・地藏堂・鐘樓などが建てられていたが、専属の僧侶もあらず閑寂としていた。浄土寺が定証に寄進されると彼の勧進によって更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され、広範な地域の人々の信仰を集める活気のある寺となったことが記されている。 文書は更に続き、嘉元元年(1303)の舎堂落成のほか、嘉元4年に行われた盛大な落慶供養の次第も詳細に記され、その文書中に見える定証の朱色の手印があざやかである。当時の盛衰を知る資料である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書浄土寺文書 寺願注文建武四年十月日トアリ通、尊氏寄進 状外9通	しほんぼくしよじょうどじもんじよ	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm、横1180cm	浄土寺に所蔵されている中世文書116通のうち11通である。浄土寺願因島地頭方年貢注文や足利尊氏寄進状、足利義教御判御教書など、南北朝時代(14世紀)から室町時代前期(15世紀前半)の古文書の一部である。 年貢注文は、浄土寺願因島(因島市)にある中庄・重井庄・三津庄地頭方の建武4年(1337)の年貢数量の注進状で、文中の年貢の中に千六百六十五俵三斗五升六合(八百三十二石八斗六升五合)にのぼる多量の塩がみられる点が注目される。尊氏寄進状は浄土寺におかれた備後国利生塔に対し、備後得良郷(真光郡大和町)の地頭職を寄進するものである。 なか、後醍醐天皇御旨(りんじ)をはじめとする残る104通は県指定重要文化財である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥法華経巻第七 天曆三年/奥書アリ	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm、横92.4cm	平安時代中期(10世紀)の装飾経。法華経の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し、後段は金泥(きんでい)書きにしたものである。巻末に、天曆3年(949)6月22日に紀則兼と女性の物部氏が道主として奉仕した旨の奥書があり、平安時代中期における金銀交書(こうしよ)経として注目される経巻である。 軸端は、熊型(ばちがた)で、鯉魚々々(ときんなご)地宝相華文である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経巻第九十九 「薬師寺印」未印並二「薬師寺金堂」ノ黒印アリ	しほんぼくしよだいはんにやきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm、横35.8cm	「魚養経(ぎょようきょう)」と呼ばれる古くから朝野僧魚養(うおかや)発願経と伝えられるもの一巻で、奈良時代(8世紀)の代表的な写経のひとつである。魚養は奈良時代末から平安時代初期(8世紀終り~9世紀初め)にかけての人物で、医者であり能書家として知られる。 もとは奈良薬師寺に伝わったもので、天平宝字9年から宝龜元年(765~770)に写されたと言われる。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息(青蓮院宛)	しほんぼくしよおひまてんのうしんかんあしよそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	綴葉装、平仮名	縦14.4cm、横12.4cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇。正親町天皇(在位1557～1586)が京都の青蓮院(しょうれんいん)門跡(もんせき)に宛てた書状である。新年のお祝いに對して返礼を述べたもので、ちらし書きで記されている。正親町天皇は、天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をあげたことで知られる。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書陽光院御筆御消息(五月十五日青蓮院宛)	しほんぼくしよようこういんおんひつみしよそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書、折本	26.0×10.8cm(第1巻表紙)	陽光院は正親町天皇の第一皇子・誠仁(さねひと)親王の死後に追贈された尊号である。織田信長によって次代の天皇候補とされ、信長の死後も即位最近か見られていたが、天正14年(1586)に病没した。天正13年(1585)、誠仁親王が青蓮院尊朝親王に於てた書状で、大和の多武峯(とうのみね、奈良県)が勅願所であることから、天下が静まったこの時に内大臣・豊田秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書別異弘願性戒抄	しほんぼくしよべついつくがんしよかいししよ	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	表紙は宝相唐草文、見返しは絵。軸は鍍金装飾。	縦25.8cm、全長85～148cm	鎌倉時代(1192～1332年)の天台座主(ざす)・慈円(1155～1225年)が筆者と伝えられる書籍。京都・青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土宗系統の注釈書の一つである。綴葉(でうさ)装で、別異弘願(べついこうがん)なわら弥陀四十八願について往生礼讃及び観経疏の注釈を加えたもので、平仮名書きであることは、鎌倉時代の念仏思想の一端を示す対資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり史書「愚管抄」の著者として知られる。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	貫之家歌合	つらゆきけつたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書	縦28.3cm、全長9.22cm、	歌合(うたあわせ)とは、平安時代初期(9世紀前半)以来宮廷や貴族の間で流行した遊戯で、左右に分れた歌人がその詠んだ歌左右一言ずつを組み合わせ、優劣を争いその多少によって勝負を競う遊びである。この一巻は、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)、藤原忠通の命で仁和年間から大治年間(885～1131)に行われた歌合を類別集した「類聚歌合」20巻本の巻十七の一部である。筆者の確証はないが、藤原俊忠筆と伝えられる「二条切(にじょうきり)」の一つである。 天慶2年(939)周防国で催された紀貫之(きのつらゆき)家の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で、和歌資料として貴重なものである。 ※紀貫之(868?～945?)…平安時代初期の歌人		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(考古資料)	日向国児湯郡持田古墳出土品 画文帝神獸鏡1面、菱形四獣鏡1面	ひゅうがのくにこゆぐんもちだこみんしよつひん がもんだいしんじしよきょう へんけいししよきょう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	画文帝神獸鏡(中国鏡、平縁、四神四獣鏡) 菱形四獣鏡(倭製)	画文帝神獸鏡/直径21cm 菱形四獣鏡/直径20cm	持田古墳群第25号墳(宮崎県児湯郡高鍋町持田)出土の青銅鏡。画文帝神獸鏡は、中国六朝(りちよう)時代(3～7世紀はじめ)の鑄造と思われる平縁の四神四獣鏡で、紐(ちゆう)をとりまいて有筋垂弧文(ゆうせつしゆうごもん)があり、その内区に神像龍虎を大きくあらわし、それらの間に随従する多くの神人禽獸(きんしんじゆう)が鑄出されている。内区には半円方形帯、外区内側に禽獸文帯を、外側には菱形文帯をめぐらしている。銘文がある。 菱形四獣鏡は、倭製鏡とされ、内区の四獣頭部には又角(しゃかく)が認められ、外縁に「火竟」の二文字を鑄刻(そく)している。 ※持田古墳群…5～6世紀の古墳群		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	名勝	浄土寺庭園	じよとじていえん		尾道市東久保町	昭52.5.7			浄土寺境内の西北部、方丈(ほうじやう)と庫裡(くら)の間に東南を囲われた築山泉水(せんすい)庭である。山脚を利用して築山を構え、前面は砂敷の間に細い池を設ける。築山一帯に多数の石を配し、中央部の石組には特に意匠を凝らしてある。方丈と書院から飛石を打ち並べ、築山の両側から築山背後の茶室・露滴庵(ろてきあん)の露地に続いている。ソテツやツツジ等の刈込が多い。 寺蔵の古絵図によって本庭は文化3年(1806)長谷川千柳によって作庭され、いわゆる「行の築庭」の様式によるものであることが知られる。また、この絵図によって作庭当初の地割と石組が良く保存されていることが明らかである。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(建造物)	西国寺仁王門	さいこくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸、入母屋造、本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内で数少ない樓門形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。 元文5年(1740)の棟札があり、その時の修復で、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人、屋根葺き職人21人、大工19人、合方大工212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師絵伝	けんぼんちやくしよくこうほうだいしえてん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦152cm、横96cm	室町時代中期(15世紀)に製作された。弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが、この絵は各部分とも力強い筆致のみことな絵伝である。 第一軸は「大師誕生から久米寺懸棺」まで、第二軸は「入唐から浄土写経」まで、第三軸は「惠果禅師から三益技師」、第四軸には「応天文投筆から二荒日光まで」、第五軸には「東寺勧講から二間修法」まで、第六軸には「高野尋人から入定御拝見」まで、第七軸と第八軸は2幅1組でストーリーがづられ「陸博参詣」と第八軸「法皇行幸」が描かれている。また、図の下から上へストーリーが展開している。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師像	けんぼんちやくしよくこうほうだいしぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦78cm、横39cm	高野山の真如親玉筆の御影の系統に属する作品で、小幡ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しく、その布置から見て天授3年(1377)の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われる。それから判断して鎌倉時代末期(14世紀前半)の作かと考えられる。		

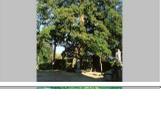
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩像	けんぼんちやくしよくしぞうぼさつぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦110cm、横55cm	地藏菩薩は、六道の衆生を救う菩薩と言われ、わけても地獄における救済の力を中心として信仰され、わが国でも平安時代中期から鎌倉時代(1185～1332)にかけて信仰が盛んになり、庶民生活と結びつき、その遺像、絵画は多い。 本品も、そのような室町時代(1333～1572)に描かれたと思われる作品で、左足を下げ、右足を立膝にして岩座に坐す。右手を頬にそえ、左手には錫杖(しゃくじょう)を持ち、左右に掌善童子、掌悪童子の二童子を配した延命地藏菩薩の像である。彩色は敷金(きりかみ)・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた、色彩豊かな画像である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人像	けんぼんちやくしよくほうねんしやうにんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本着色 軸装	縦69cm、横42cm	浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で、黒の法衣をまとい高麗線(こうらいべり)の雲に坐り、数珠を手にし頬骨を高く額は二段に描かれたいわゆる法然頭である。法然の画像としてはごく古いもので、寺伝によると円光大師(法然)自筆の摹影といいが、画蹟に建暦口年(1379～1381)正月六日とあり、室町時代初期(14世紀)の作であることが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絵馬(鶴島毛○毛) ※鏡の裕字、○は馬へに縁のワケ)	えま(そもうりよもう)	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm、横176cm	天正5年(1577)播州明石郡船上山(今の兵庫県明石市船上山)の石井与次郎兵衛尉が奉納した絵馬。 2枚1対の大形の絵馬で、細い縁に杉材の薄板を縦に貼り合わせ、その表面に紙をはり、首をあげた(84cm)毛の馬と首をふした姿の(94cm)毛の馬を一匹ずつ墨書淡彩で描いたものである。いづれも札に綱でつなげられており、取はついでない筆力雄健な絵である。 奉納者の石井与次郎兵衛は、後に豊臣政権の水軍の一員としてその名がみえる人物であり、瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代(1573～1602)の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。		開運施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本着色、軸装	縦149cm、横91cm	光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので、古くは三幅一対であったが、その後一帯幅のものとなった。 本品は南北朝時代(1333～1392)のもと考えられ、本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院とともに与えたと伝える。 中央に「南無不可思議光如来」の九字の尊号を配し、左下隅に「帰命尽十方無量光如来」の十字尊号、右下隅に「南無阿彌陀仏」の六字尊号を配し、釈迦、彌陀の二尊像を描いている。そして右に天竺(てんじく)・雲且(しんたん)の十高僧を、左に和順の像を描き、その下部に聖徳大師像を加えている。光明本尊は東日本には多いが、西日本には少なく貴重な資料である。 福善寺は天正元年(1573)行宗法師が開いた浄土真宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色春日曼荼羅	けんぼんちやくかすがまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本着色、軸装	縦99cm、横36.4cm	曼荼羅には、儀軌(ぎぎ)によって密教の根本理念を図式化したものと、特殊な尊像を中心にその曼荼羅(まんだら)の裏に描かれた加神祇の際に奉迎(ほうこう)される別尊曼荼羅がある。 本品は「春日曼荼羅正統」に称される別尊曼荼羅のひとつで、上方に蓮山を描き、中央に本地仏を下方に春日大社の御使いと云われる神鹿の立つ姿を描いている。破損も少なく保存も良好な室町時代(1333～1572)の作である。		
県	重要文化財(絵画)	刺繍阿彌陀三尊種子曼荼羅	ししゅうあみださんぞんしゆじまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繍、軸装	縦73cm、横27.5cm	着色絹糸で上方に天蓋を刺繍し、中央の三尊の円光の中の蓮座に、毛髪で刺繍した種子がのる。その下には三層の円札上に火舎、花瓶を刺繍して供え、三尊を記する形をあらわしている。蓮座蓮弁の糸は、暹羅(しんらん)の糸の色調であらわし華麗である。表装中廻しの裂の上方には散華、下方には蓮池を構った豪華なもので、刺繍技術を知るうえに貴重である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩絹柳観音像(殿絶道沖の賛あり)	けんぼんちやくさいようりゅうかんのんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩、軸装	縦35.7cm、横18.4cm	古くから仏画の画題として愛好され、種々の寓意の消除を本誓とするという絹柳観音を描いたもので、小幅ではあるが、繊細流麗な墨線は像の隅々にまで生きており、特に宝冠の描写は精緻である。寺伝によると牧路(もつち)筆といわれる落款等もなく、確認の根拠を欠いているものの画幅上部の殿絶道沖(ぎぜどうちゅう)の賛により、南宋時代(12～13世紀)のすぐれた画工の手になる作品であることがうずける。 なお、賛者殿絶道沖(ぎぜどうちゅう)は、淳祐10年(1290)に死去しているから、この作品は13世紀半ば以前のものと想われる。 光明寺は、南北朝時代初期(14世紀前半)、足利尊氏の従軍僧によって天台宗から浄土宗に改宗したと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩十王像	けんぼんちやくしよくしぞうぼさつじゅうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本着色、軸装	縦94.3cm、横86.0cm	嘉禎41年(1562)朝鮮半島で描かれた仏画で、李朝朝鮮の国王や王妃等の寿命長久と国土の安泰、人民の安寧、仏法興隆を願って、清平山人が描いたもの。この十王像を描き清平寺に安置して香をたき、要にその功德を一切衆生に及ぼさんと祈念したと記す。 中央に地藏菩薩、その周辺に仏法を守護し死者を救く十王を描く。 光明寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色如意輪観音像	けんぼんちやくしよくいりりんかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦80cm、横40.5cm	南北朝時代の建武元年(1334)の作で、図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したという。 六臂(び)の如意輪観音を墨線で描き、彩色はほとんどない。水墨的な淡彩の画像は鎌倉時代末期から室町時代(1333～1572年)へかけての初期。それは仏画本来の礼拝の対象としてのものから臨貫的な画へと移行することを意味するものと言われる。本画像は、上記のような絵画的な見解とその記年銘がほぼ一致する点からみて、貴重な資料であると考えられる。 如意輪観音は、変化観音の一つで、如意とは如意宝珠、輪とは法輪を意味し、それらの功德によって衆生の苦を抜き、楽を与える観音である。像形には二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂等があるが、六臂の例が多く流布しており、その最も著名な例としては、大版観心寺の木造如意輪観音坐像があげられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじざうぼさつぞう	1躯	尾道市御調町今田	昭60.9.19	寄木造、白形二重蓮座	像高41cm、膝張34cm、光背の径29.1cm、台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらわし、半眼に開いた眼は木彫で、首には三道がある。通肩(つうけん)にかけた法衣及び身肌は金色で、衣には唐草や蓮紋を描き、その彫法は写実的で流麗である。胸には蓮彫(すかしぼり)金具の環状を付けている。右掌には当初の環状(しゅくしやう)をもち、左掌には宝珠をのせていたと思われるが今は欠失している。台座、光背(こうはい)ともに当初のもので、室町時代(1333～1572)の作である。 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる。 ※環珠(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造持国天立像	もくぞうじこくてんりゅうぞう	1躯	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造(頭部・胴体は一木形成)	高さ40.5cm	寄木造ではあるが、頭部と胴体は一木形成にした小像である。鎧を着け右手を肩の上まで上げて鉢(ほこ)を持ち、左手は腰においている。肩裂(かたぎれ)及び帯布を着け、腰の両側から懸(ひれ)まめを垂らしてあり、もとは彩色されていたと思われる痕跡があるが、今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んだ素朴で、顔部に剛立(またた)てを造り、頭髪を束ねて五眼をほめ、口を強く結んだ氣力にあふれる相の像である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	木造一鎖上人坐像	もくぞういちしんしょうにんざう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造、乾漆、玉眼	像高80cm、膝張82cm	時宗の寺院である西福寺の開基と伝えられる六代遊行(ゆぎょう)上人一鎖の坐像である。この像は非常に写実味豊かで、頭部・顔面の筋骨や肉付きは巧みに表現されており、顔面・両手の皮膚色・唇の赤色等の彩色にすぐれている。像の仕上げは、木彫の上に麻布を貼り漆を塗布する方法を一度くり返し、像全体に穏やかさを漂わせる工夫がなされており、作者は不詳ながら、その確かな技術がうかがえる。南北朝時代(1333～1392)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	金銅阿彌陀如来及び兩脇侍立像	こんどうあみだにょらいわよりょうきょうりゅうぞう	3軀	尾道市東土堂町	昭55.6.24		中尊阿彌陀如来立像／全長57cm、宝身48cm、台座9cm 脇侍觀世音菩薩立像／全長39cm、宝身31cm、台座7.5cm 脇侍勢至菩薩立像／全長38cm、宝身31cm、台座7cm	鎌倉時代(1192～1332)以降、全国的にその造立信仰が流行した。備後国長野の普光寺(ぜんこうじ)の本尊を模したと称せられている「普光如来」の一例である。本来あったはずの一光三尊の板光背(こうはい)を欠失しているのは惜しいが、室町時代(1333～1572)のすぐれた遺品である。中尊の両手とも刀印であるのはすこぶる珍しい。真日本に多く西日本に比較的に少ないと従来いわれてきた普光如来像の分布に、新しい一例を加えるものである。 光明寺10代住職融印が、文明元年(1469)普光寺本尊を写した本尊を、大永2年(1522)同じく融印が開創した塔頭南之坊に安置したものである。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 金剛界 附台座	もくぞうだいにちによらいざう こんこうかい つけたり だいざ	1軀	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm、膝張60.0cm、台座高43.0cm	いわずゆる智尊(ちよき)印を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の金剛界大日如来である。本像は寺伝にちれば、別件胎藏界大日如来坐像(県重要文化財)とともに浄土末寺の極楽寺の本尊であったと伝えられている。面部の彫り口は穏和で、また着衣の衣文の彫り口も浅く、優慮からも内割り(うちくわり)が施されており、内割りは大きいと平安時代(794～1191)の特徴がよく出ている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 胎藏界 附光背	もくぞうだいにちによらいざう たいざうかい こうはい	1軀	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造、舟形板光背	像高90.0cm、膝張68.0cm、台座高118.0cm	法界定印(ほうがいじょういん)を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の胎藏界大日如来である。檜材寄木造である。頭頂には余り高くない宝髻(ほうけつ)があるが、これは別件で地盤部に預(は)ぎ合わす。金剛界の像とは彫法や製作技法も異なり、別人の作とみられるが、胎・金二界の大日如来が遺存することは珍しく、平安時代(794～1191)の作ということとあまって重要な件例と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、金泥彩漆箔	像高139.0cm、裾張34.0cm	頭頂から足下、脇手、環状金具、表面彩色等、細部まですべて当初のまま残っており、その保存状態はきわめて良好である。作風は、細部まで非常に丁寧に作り、優れた技術をもった仏師の作と思われる。光背(こうはい)、台座も同時代のもと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期(13世紀中頃)の作である。 ※環珠(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうしょうにんざう	1軀	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、彩色	像高82.0cm、両張48.0cm、膝張74.0cm、面長18.0cm、面幅16.0cm	時宗の開祖一蓮上人の高弟「真教」の僧形坐像である。法衣は白衣の上に墨染めの衣を着し、袈裟を彫り成形され、着衣全体には精緻な文様が彫(きり)金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これらは当初の状態ではほぼ完全に残っている。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代(14世紀)と推定される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1軀	尾道市西久保町	平28.10.27	檜材、寄木造、差し首、玉眼嵌入、白毫水晶(新補)嵌入、肉髻珠(後補)嵌入、着衣全体に鍍金・盛り上げ彩色	像高: 130.9cm	常務寺本堂本尊である本像は、頭輪部の(パランス)がよく整えられているとともに、流麗な衣文(えもん)が的確に彫成され、着衣全体には精緻な文様が彫(きり)金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これらは当初の状態ではほぼ完全に残っている。 本像は、平成24年度の保存修理の際、足柄(あしほ)の銘文から、正中2年(1325)に仏師美作(みまさか)法橋(ほうきょう)宗徳(そうたけ)又は「宗聖(そうせい)」により約3か月間の期間で制作されたことや、50人以上の仏名の寄進者などが確認された。 本像は、数少ない時宗(じしやう)寺邸の遺構である本堂本尊として制作年代などが分かることに加えて、制作優秀であり、特に着衣全体の精緻な装飾が当初の状態ではほぼ完全に残っている遺例がほとんどないことから、貴重である。		

区/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造五劫思惟阿弥如来坐像	もくぞうごこういあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材か、寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入、肉髻珠(後補)貼付	像高:112.0cm	五劫思惟阿弥如来像は、五劫という長い時間思惟にふけり、理髪をしなかつたために長大な頭髪となったことを表す大きく膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本堂本尊である本像は、風俗のある愛想の「ワンス、ふくよかであるが目鼻立らのすっきりとした面部の表現、整えられた衣文表現などに振れた造形感覚が認められる。当寺の古記録によると、本像は元禄15年(1702)に仏師(ぶし)法橋(ほつきょう)安(あん)清(せい)により造像されたことが記されている。江戸時代以前の木造彫像の五劫思惟阿弥如来像は全国的にほとんど遺例がない中で、本像は彫技が的確であり、造形的に優れているだけでなく、制作年代や作者などの由緒が分かるものとして、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来及び両脇侍立像 附 観音菩薩像内納入品 阿弥如来印仏 十五枚 勢至菩薩像内納入品 阿弥如来印仏 包紙添 十一枚 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥如来像内納入品(追納) 一、台座光背寄進状 包紙添 一通 一、位牌 一柱	もくぞうあみだにょらいおよりよきょうりゅうぞう	3躯	尾道市東久保町	令和元年(2019)10月21日	檜材、寄木造、金泥塗り、截金、玉眼嵌入	阿弥如来立像(中尊) 像高:98.9cm 髮際高:91.8cm 観音菩薩立像(左脇侍) 像高:66.3cm 髮際高:55.8cm 勢至菩薩立像(右脇侍) 像高:66.4cm 髮際高:55.7cm	本三尊像は、時宗寺院・西郷寺の本堂本尊で、阿弥如来像を中尊として、前傾の観音菩薩像と勢至(せいし)菩薩像を脇侍とする。来迎形の阿弥如来三尊像である。檜材、寄木造。阿弥如来像は、ふくよかな顔貌、矩形(けい)のかつしりした体軀に緩やかな衣文線が施され、立体的で端正な造形を持つ。両脇侍像は、髭の濃い婦身の像で、随前に題材から彫材を組み合わせて精緻な彫刻が造形を生み出され、絵画的な律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚と高い技術を窺み取ることができる。平成25-26年の保存修理の際、両脇侍像の内から印仏が発見され、その中に弘安8年(1285)の年紀が確認された。納入品は造像当初のものと思われる。本三尊像は同年に制作されたと考えられるに至った。以上より、本三尊像は、制作優秀であるとともに、年代の明らかな来迎形阿弥如来三尊像の基準作に位置づけられるため、本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。また、印仏を始めとする納入品も、本三尊像の由緒・伝承を示す重要な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製鋳口	どうせいぐわにぐち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm、重量15kg	鋳口は、鉦鼓(しょうこ)を二つ合せた形に似て、神社仏閣の軒先に懸けてあり、前面に短(か)の緒(いと)という布縷を垂らし、参詣人はこの緒を手に持ち、振って鼓面を打ち乱すものである。本品も浄土寺本堂(国宝)の正面に懸けられている。刻銘があり、貞和5年(1349)の作であることが分かる。「備後国尾道浦浄土寺観音堂也」貞和五年己丑五月十八日大工阿部房綱		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	金銅蓮花輪宝文置説相箱	こんどうれんげりんぼうもんおきせつぼうこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm、横36cm、高さ12cm	長方形の箱で、導師が説教の原稿などを入れる。本製蓮華堂で前面に金銅の蓮(れん)花(げ)文(ぶん)や輪宝(りんぼう)文などの金具を置き、ふちに唐草文を浮彫りにした帯状金具を貼り、上げ底の脚部は金銅板履輪(ふくりん)を施した格狭間(こうざま)を透かす。製作の年時は「慶長第三戌成(未漆書の銘)」すなわち慶長3年(1598)で、手法と様式は安土桃山時代(1573~1602)の特徴を示している。		
県	重要文化財(工芸品)	白紫緋糸段威巻巻附 兜眉庇	しろむらさきいとだんめどしはらまき	1頰	尾道市因島中庄町字寺迫金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm、胴回り72cm	腹巻は、背中引合せ形式の初期のものも兜も兜もない軽武装用の纏で、鎌倉時代末頃(14世紀前半)発生したと思われる。その後、室町時代(1333~1572)には大流行し、背中の引き合わせ部分に背板をつつけ、更に袖をつけ兜も具備するようになる。本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威(おど)した、美しく軽快な姿の腹巻である。伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が、小早川隆景より拝領したと言い、村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鑄鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもの。	高さ37cm、幅28.5cm	もと浄土寺利生塔(りしやうとう)にあつたと伝えられる一対の燈籠。春日厨子の形をとる。鑄鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもので、軒(のり)を美しくするため、かや良いの中央に折れを作るなど、時代の建築の作風をよく反映する。屋根の上には三鈴(さんねい)のすかしを二つ並べるが、ひねりこ蓮子(れんじ)に菱形をきざんだ欄間、きびきびしたり形の格狭間(こうざま)などは南北朝時代初期(14世紀前半)ごろの様式を示している。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	木造厨子 木造厨子台(旧太子堂安置) 1基	もくぞうし もくぞうしだい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	春日厨子 大(高さ1.6m)中(高さ1.3m)、小(残欠) 厨子台 幅2.7m、奥行1.28m、高さ32cm		3基の厨子は春日厨子で、それぞれ聖徳太子像(重要文化財)を納めていたものである。厨子の台は、重ね妻の文様を蓮子の中(なか)にきざみ出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで、厨子とともに南北朝時代(1333~1392)ごろの作と推定される。台及び厨子とともに簡素なすっきりした秀作である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ、紙とめ	径96cm、高さ88cm、胴回り301.5cm	胴内銘によると、正和5年(1316)に大工教通・玄孫により製作されたもので、皮に墨で雲龍と鳳凰がかかれており、紙留(ひよどめ)である。また、皮の張り替えは、延元元年(1336)・建文4年(1358)・応永6年(1399)・応永34年(1427)・元和4年(1618)の5回あり、何年で張り替えたかがわかり、歴史的資料としては珍しい。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	銅製地藏菩薩懸仏	どうせいしぞうぼさつかけぼとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫、半肉彫、毛彫	径24.2cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。円形銅板上中央に宝珠と鐺柱(しゃくじょう)とをもつ地藏菩薩が蓮台上に坐し、頭光身光を向う側に表されている。地蔵と蓮台は、一枚の銅板を組んで彫りに押し出して現われ、衣文蓮台などの細部は、よどみのない流れるような線彫(しゅうちよう)で表現し、頭光・身光とともに円形銅板上に嵌められている。懸仏は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので、神社や寺院の内陣に懸けられていた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鏡	どうしょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平5.2.25	和鏡、壇座に蓮華文	総高93.5cm、口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鏡で、三原鎔物師の製作したものである。壇座(つぎざ)には蓮華文を鏤出している。 また、慶長の追銘には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に供出されようとした本鏡が、町衆の寄附によって免れたことが刻してあり、天文年間(1573～1591年)当時の和鏡様式を良く伝えているのみならず、向土寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。 向土寺は臨済宗仏通寺の大通禪師の閉山になるまで、瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頭五輪塔形舍利塔	こんどうせいゆうけいごりんとうがたしゃりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	平8.9.30	銅造、鍍金	総高6.45cm、舍利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)にかけて製作された舍利容器である。通常の五輪塔と異なり、火輪と水輪の間に円筒状の部分で作られており、むしろ宝塔を意匠したデザインと言える。水輪部内部に舍利を納める円筒とその蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され、洗練された美しさを感ずる。 光明坊は鎌倉時代以来の古刹であり、西大寺流律宗の影響が伝わる。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火焔宝珠形舍利容器	こんどうかえんほうじゆがたしゃりようき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高 14.2cm、基壇径 5.6cm、独鈷杆(高さ)4.6cm、輪宝径 4.9cm(輪宝中央納穴 縦横 0.4cm×0.5cm)、蓮華座径 4.4cm、宝珠(高)3.9cm(径)3.2cm 火焔最大幅 5.6cm	当該舍利容器は、下から、台座、輪宝(りんぼう)及び宝珠から成る。 台座は、六方隅入りの円形の基壇の上に反花座(かえりばなざ)が載り、その上に独鈷杆(とっし)が立てられる。独鈷杆の上部は輪宝と宝珠を連結するほぞとなる。 輪宝は、中央部に独鈷杆の先が入るように四角い穴が設けられている。 宝珠は、蓮華座の上に載り、四方を火焔が囲んでいる。蓮華座は、5段で各段8弁の計40弁の蓮弁から成る。宝珠内部には、白色とやや黄色味を帯びた米粒状の舍利が納められている。いずれも水晶製と思われる。宝珠は水晶製で、これ以外は金銅製で鍍金が施されている。 広島県重要文化財「浄土寺文書」によると、暦応3(1340)年、足利尊氏の弟の直義(ただよし)が仏舍利2粒を浄土寺に奉納したことが知られる。当該舍利容器の制作時期は南北朝時代と思われる。これがこの仏舍利を収めた容器である可能性がある。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺寄附帳	しほんぼくしよさいこくじきふちよう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本		南北朝時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけて行われた西国寺の諸堂宇の建立再建に関する寄附を中心とした山名氏徳政を中心とした各の名前や寄進内容が記されている。「沼津郡新庄長者実秀」の名もみえ、中世の富裕層の一層を見ることもできる。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺建立施主帳	しほんぼくしよさいこくじこんりゆうせしゅちよう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦33cm、横122.4cm(八折)	室町時代(1333～1572)の西国寺再建で施主となった人たちの署名帳である。筆頭の「征夷將軍」は花押から見て足利6代將軍義教(1394～1441)と考えられ、次いで本願導師である西国寺の若草(ゆうそん)僧正、次いで、細川持之、高山持国、山名持豊、大内教弘など、幕府の重臣や守護大名たちの名が見える。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺不断経修行事及西国寺上銭帳	しほんぼくしよさいこくじふだんぎょうしゅうぎょうじおひよさいこくじあげせんちよう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦30.3cm、横702cm(52折)	戦国時代の文明9年(1471)6月16日、西国寺の不断経修行を再興するため、西国寺支配下の各坊に上銭をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197筆にのぼり、尾道をはじめ、吉舎・今高野山・御調などの備後国内の備中兼王寺などの名が見える。 不断経修行は天文元年(1108)堀院道隆のため始めたが、武家の領地押領のため中断していた。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	版本大般若経 附 経櫃 3櫃 中箱 60箱	ほんぼんだいはんにゃきょう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本、折本	縦26.3cm、横10cm程度	近江源氏の佐々木氏頼が康暦元年(1379)に開版した版本で摺った大般若経で、600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書銘により、応永9年(1402)6月に西国寺業師堂(金堂)に施入されたことが記されている。 蓋裏墨書銘は次のとおりである。 「寄進備後国御調郡尾道浦西国寺業師堂 応永九年壬午六月八日勅主権律師慶弁願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 経櫃 1櫃 中箱 18箱	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	112帖	尾道市西則末町	昭30.1.31	紙本墨書、冊子、旋風栗(せんふうりょう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛時が三島大明神に施入した大般若経。全巻に施入の奥書がある。1行17文字で、界線は墨書である。旋風栗(せんふうりょう)の表装を施したこの経巻は、全巻を同時期に書写したものではないようで、奈良・平安時代初期(8世紀前半)の書風も見える。 天文22年(1553)に東原六村の氏子により八幡宮に寄進され、以来、東原八幡神社に伝えられた。種の蓋裏に墨書で寄進した旨が記されている。 「天文廿二天矣五東原之部六村願主八幡宮御経五百内六百内住侶源正月十三日氏子諸人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	2帖	尾道市美/郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書、折本		平安時代の永久6年(1118)に明法生藤原季行が書写した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられ、各巻に奥書がある。1行17文字、界線は墨書である。		

区/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺塔婆勸進帳	しほんぼくしよさいてくじうぼかんばんりょう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書、卷子装	縦42.0cm、横25.5cm	室町時代の永享元年(1429)に寄尊(ゆうそん)僧正が西国寺三重塔(重要文化財)の建立を発願した際、寄附を募るために趣旨を記した勸進帳である。西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書因島村上家文書	しほんぼくしよいんのしまむらかみけもんじょ	3巻	尾道市因島中庄町宇字迫(水軍城資料館寄託)	昭37.3.29	紙本墨書、卷子装	第一巻長さ222.7cm、幅40.6cm、第二巻長さ746cm、幅40.6cm、第三巻長さ450cm、幅40.6cm	因島を中心とする中世荘園関係文書。感状及び書簡など90通からなる因島村上家伝来の古文書群。鎌倉時代から戦国時代(12世紀末～16世紀)の毛利・小早川関係のものまであるが、すべてが因島村上家に関するものではない。その関わりについて種々論議されているが、確たる説はない。いずれにしろ、中世における因島及び瀬戸内海地域の状況を知るうえで貴重な史料である。因島村上家はいわゆる三島村上家のひとつである。室町時代(1333～1572)以来因島や向島などを拠点に活動し、金蓮寺や中庄八幡宮など因島村上家ゆかりの社寺も数多く見られる。後、小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財(典籍)	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじざいめいかわら	4巻	尾道市因島中庄町宇字迫 金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦、銘へら彫刻	丸瓦縦32cm、横14cm、高さ7.6cm 棟瓦縦30cm、横29cm	因島村上吉資が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年(1450)に御堂の上瓦のことを管書(へらがき)した丸瓦と棟瓦である。尾道の瓦大工が製作したもので、住持快秀(かいしゆ)・大堤那宮地大炊助妙光(おおいのすけみょうこう)・瓦大工尾道住衛門五郎経次などとともに、浦々の結縁合力者の名が列記されている。宮地妙光は俗名明光、村上吉資・吉資の家老であったという。また、伯耆大山の僧侶の名前も見られ、瀬戸内と日本海の交流の様子をうかがうことができる。金蓮寺は、因島のほぼ中央にあり、因島村上家の菩提寺である。宝徳元年(1449)村上吉資が創建したと言われ、開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財(典籍)	法華経版木	ほけきょうはんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	南北朝時代の応永2年(1395)9月から3年正月にかけて、僧行安の勸進により、浄土寺で開版された版木。広く俗人の理解をはかるため、経文に送り仮名や送り点を施しており(巻八の刊記)、付別の版経の古い資料として貴重である。また、この版木は、応永5年(1398)重刊近江八幡神祇社の後点法華経と本文別点が大体同じであり、播磨書写山の心空の校定版の改刻版の一つと言われる。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	梵網経版木	ぼんもうきょうはんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	室町時代の応永11年(1404)浄土寺で作られた版木。「備後国尾道浦於浄土寺開版応永十一年甲申の刊記があり、地方における印刷文化発達の事例として貴重である。梵網経は5世紀後半に中国で成立したと推定されている経典、日本仏教でも尊重され、多くの注釈が作られた。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	浄土寺文書	じょうとじもんじょ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書		鎌倉時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけての文書類である。浄土寺が、天皇家をはじめ足利将軍家・管領・守護・守護代など密接な関係を保ちながらその信仰を集めるとともに、寺領荘園の維持に努めてきたその時代推移を語る資料類である。これらを大別すると1. 信仰関係、2. 皇室・足利氏以下諸豪族から荘園までを網羅した文書、3. 寺領年貢書付となり、それらは相互にからみあっている。寺内にあった利生塔の料所頼田村(双三郎君田村)の百姓等が、武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署起請文のような、庶民の動きを示す文書も含まれている。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大乗十法経	こんしきんぎんでいだいじょうじつぽうきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長1,012cm、幅25.7cm	紺紙十八紙を縫いで作られた経巻で、巻頭表には金泥をもって宝相華(ほうそうげ)唐草文様に題巻を描いて「大乗十法経一巻」の経題を書いている。見返しには、釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描き、表紙をつけている。本文は「仏教大乗十法経」から書き始め、金銀泥で全行の間に金銀一行ずつ交互に書き交す交書で記され、流麗な楷書で書かれた装飾経で、奥書はないが平安時代(794～1191)の作である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥無量義経	こんしきんぎんでいむりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長846cm、幅25.6cm	紺紙十七紙を縫いで経巻で、巻頭に見返し経があったと思われるが、ほとんど欠失してその残部をわずかに残すのみである。巻末には杉製の軸棒をつけ、その両端の金銅(84a3)形(ばちがた)金具は完存しており、魚々子(ななこ)で宝相華(ほうそうげ)文様を彫り出し、当時の工芸技術を知るうえで資料となる。本文は、金銀泥で全行間に金銀一行ずつ交互に流麗な楷書で書き交したいわゆる交書で、奥書はないが平安時代(794～1191)の装飾経である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大田比盧遮那成佛経巻第三	こんしきんぎんでいだいびるしゃなじょうぶつぎょう かんたいきん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長802cm、幅25.8cm	紺紙十六紙を縫いでおり、紺紙の表には金泥で宝相華(ほうそうげ)文と「大[84a]直達那成佛経巻第三」の経題を書き、見返しには山水、客塵、蓮池を描き、扉内には二人の僧が対面し、外には教人の僧がいる様子描かれている。杉製の軸の両端には金銅(84a3)形(ばちがた)金具をはめ、魚々子(ななこ)で宝相華文様を彫っている。本文は「大[84a]直達那成佛神変加持経世間成就品第五」から書き始め、銀泥の間に金泥で楷書で書き交した装飾経である。奥書はないが平安時代末期(12世紀後半)の作。		

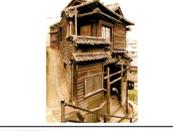
区/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遣那成仏経巻第五	こんしんていでいひるしゃなじょうぶつきょう かんたいでいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長900cm、幅26cm	紺紙十七紙を纏いた経巻で、紺紙の表には金泥(きんでい)で宝相華(ほうそうげ)文様を描き、題面に「大[84a]盧遣那成仏経巻第五」の経題を書き、見返しには菅山で那の釈迦説法の図を描いている。軸木は杉製で、両端に金銅模形(こんどうもがた)金具に魚々子(ななこ)で宝相華文様を彫り出したものをつけている。本文は「大[84a]盧遣那成仏神変加持経巻第五、字輪点第十」から書き始め、銀葉の間に金泥をもって楷書で記した裝飾経で、奥書はないが、鎌倉時代初期(13世紀前半)の作。		
県	重要文化財(考古資料)	貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしゅつどのくしゅきだいがたとき	1点	尾道市御調町市 御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm、脚部最大径41.1cm、胴部最大径23cm	この特殊器台形土器は、昭和43年(1968)御調町貝ヶ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したといわれる。特殊器台形土器は、特殊器台形土器とともに、弥生時代後期の中環(2世紀頃)以降に、吉備(岡山県・広島県東部)を中心とした境域から出土する。集落遺跡から出土する日常使用される器や壺に比べて、極めて大型化すること、鋳造文(きよしもん)・斜格子文(しゃこうしもん)、連続S状の文様などの特徴ある文様で飾られること、赤色顔料が表面全体に塗られることなどの点で大きく相違し、墳墓の葬送に關する土器と考えられている。本例は特殊器台形土器の中では古式の様相を示すものであるとともに、吉備の中環(岡山県南部)においてもこのような完存に近いものはなく、極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	史跡	太田貝塚	おおたかいづか		尾道市高須町字出口、同字竹之端	昭24.8.12 昭48.12.18(一部解除)	縄文時代前期～後期(約6000～3000年前)		松永湾西部の標高約3mの微高地に位置し、かつては直接海浜に接していた縄文時代(約12,000～2,300年前)の貝塚である。古くから多数の土器を出土して著名であるが、その所属時期はたしかでない。縄文時代の遺物としては、前期、中期、後期の土器があり、前期土器は貝層下の有機砂層に含まれる。土器のほか多量の石鏃(せきそく)、石匙(せきし)、石錐(せきすい)やハイガイ・アガリなどの貝類、獣骨などが出土し、狩猟・漁撈の生活を物語っている。なお昭和39年(1964)の調査では、遺跡の東半部に幅2.6m、深さ0.85mの溝状遺構が南北にわたって検出され、多量の古式土師器や埴壇土器が出土した。現在、貝塚の一部は史跡公園として活用されている。		
県	史跡	因島村上氏の城跡 長崎城跡 青木城跡 青陰城跡	いんのしまむらかみしのしろあと(ながさきしょうあと、あおきしょうあと、あおかげしょうあと)		尾道市因島土生町 尾道市因島重井町 尾道市因島中庄町・田熊町	昭32.9.30			中世瀬戸内海中央に勢力をふるった因島村上氏の主要な城跡群である。因島の南端にある長崎城跡は、村上氏の盛衰(ひらな)方面に対するもので最初の拠点と考えられるが、現在、日立造船敷地内にあり、遺構はほとんど失われている。島の北端にある青木城跡は因島の長崎城と共に布刈(ぬかり)瀬戸を見張る城として利用され、標高50mの丸を中心にして東の大手に向かって郭となる。なお、城跡には的場・裏木戸の地名を伝える。島の中央の青陰城跡は、標高275mの山頂に位置し各要衝を指揮する拠点になっていたと思われる。三の丸を西端に、東へ郭が並んだ城跡である。城跡には大手・裏木戸・陣屋・水落などの地名を伝える。		関連施設:水軍城資料館(0845-24-0936)
県	史跡	鷲尾山城跡	わしおやまじょうあと		尾道市木之庄町木梨	昭52.3.4			建武3年(1336)、足利尊氏に従い九州多々良浜(たたらはま)(博多)の戦いで戦功をたてた備後の豪族杉原信平(平兵衛)が木梨(13)村を領知し、翌年木梨山に鷲尾山城を築いて以来250年間、木梨杉原氏の本城として盛衰をみた山城の跡と伝えられる。東側の木梨川および西側の谷川を天然の堀とし、標高320mの険しい山を利用したこの山城はよく保存されており、面積880mの丸をほしめ二の丸・土塁跡・帯曲輪・出丸(馬場跡)および南側に4段と北西側に3段の曲輪が残っている。		
県	天然記念物	御寺のイブキヤクシ	みてらのいぶきやくしん		尾道市瀬戸田町御寺字西郷	昭24.10.28			イブキヤクシは針葉高木で、日本では主として青森県以南の太平洋沿岸地域に自生するが、多くは庭園木として栽培されている。本樹は県内有数のイブキヤクシの巨樹である。樹高は7.6mで、主幹は地ぎわで東西の二大支幹にわかれ曲折しており、植物形態学上からも価値の高いものである。なお、イブキヤクシは、ビヤクシの別名である。		
県	天然記念物	山波良神社のウバメガシ	さんばうしろじんじやのうばめがし		尾道市山波町	昭34.7.15			ウバメガシは、我が国西部の海岸地帯と中国大陸の南東部に融離分布する常緑のカシである。本樹は、地上約1.5mで大数多くの支幹に分かれ、さらに南方にやや離れて三支幹が地面から出ているので、現状では一樹叢の観を呈するが、本来、単一の樹木であると考えられる。全国有数の巨樹である。本樹は指定時、海岸近くに位置していたが、その後、生育環境の悪化により北方300mの尾道造船(株)構内へ移植された。		
県	天然記念物	垂水天満宮のウバメガシ群落	たるみてんまんぐうのうばめがしぐんらく		尾道市瀬戸田町垂水	昭53.10.4			本群落は、生口島西側の龍甲山(海拔約30m)内にある天満神社(垂水天満宮)参道の両側、南東及び南西斜面に発達している。樹高5～15mのアカマツが散生するが、ウバメガシが優占し、ほとんど純林の感がある。本群落は、群落の規模としてそれを凌駕し県内有数のものである。地上50cmの幹周が1mを超える大木も見られ、本地方の海岸急傾斜岩地に特有なウバメガシ天然林の面影を留めるものとして貴重な存在である。		
県	天然記念物	阿弥陀寺のビヤクシ	あみだじのびやくしん		尾道市向島町岩子島	昭53.10.4			本樹は、樹高約16m胸高幹周2.7mで、植栽されたものと思われるが、すでに県指定となっているビヤクシに比べて、直立性で、豊かに発達した枝椏が大きな広卵形の樹冠を形成し、樹勢も極めて旺盛である。かなりの巨樹である上、本種の生育形の一つを代表するものとして植物学的に価値が高い。		

区/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	菅のムクノキ	すげのみくのき		尾道市御調町菅字竹ヶ垣	昭59.1.23			ムクノキは関東地方以南の暖地に成育し、台湾、中国大陸南部及びインド半島まで分布する落葉広葉樹である。 菅のムクノキは、御調町の中心部である市の東方約3kmの地点にある菅の集落内の比較的高い位置にある。本樹は、樹高24.38m、胸高幹囲4.68mで、県内有用のムクノキの巨樹で、熱帯降雨林の樹種などに見られる板根が良く発達しており、学術上の価値は高い。		
県	天然記念物	仁野のナナミノキ	にののなみのき		尾道市御調町仁野字岡田沖	昭59.1.23			ナナミノキ(別名ナナメノキ)は関東地方以西の近畿、中国、四国及び九州の諸地方に生育し、中国にも分布するセトノキ科の常緑広葉樹である。南向きの緩斜面の畑地帯の中腹にある仁野谷観音堂の境内にあり、樹高約17m、胸高幹囲2.64mを測り、県内最大級の規模である。		
県	天然記念物	良神社のクスノキ群	うしとらじんじゃのくすのきぐん		尾道市長江1丁目	昭63.12.26			良神社は千光寺山麓、海拔12～20mに位置している。境内には、拝殿の東方に1株(1)、社殿南側の階段状に並んだ合地の1、2、4段にそれぞれ1株計3株(2、3、4)、合計4株のクスノキが大きな樹冠を広げている。それぞれ樹木の状況は次のようである。 (1)…神社の入口を入ってすぐ右側、拝殿の東前方に位置する最も大きい株である。主幹は地上2.7～3.2mの所で、太木の通し交駁に分かれ、樹皮上にはコナガ類が多数発生している。 (2)…南側階段合地の第1段、社殿寄りにある巨岩の横に生じ、樹幹がやや東に傾いている。 (3)…第2段にあり、樹幹はほぼ直立する。 (4)…最上段の北寄りにあり、(3)の株とほとんど同じ大きさである。		
県	天然記念物	鏡浦の花崗岩質岩脈	かがみうらのかこうがんしつがんみやく		尾道市因島鏡浦町字小鏡	平17.4.18			鏡浦集落の北東端にある岬の突端から南に続く東海岸に見られる地質現象である。 黒色の泥質岩(でいしつがん)類を主体とする堆積岩類中に、硬白質の花崗岩質岩脈が、南北方向にほぼ水平に貫入している。 岩脈の主脈部分は、北端では約2mの幅であるが、多少の膨縮を繰り返しながら、南に約120mにわたって連続している。主脈から分岐した支脈は幅数cmの細帯となっている。露頭の北端から約60m南では、淡緑色のランプロファイヤー岩脈が堆積岩類と花崗岩質岩脈を約1m幅で垂直に切って貫入している。以上のような岩類から構成されるこの露頭は、広島県南部の地質現象を代表する典型的なものである。干潮時には、海岸に沿って連続する露頭を詳細に観察することができる。 (注1)「花崗岩」とは、石英・長石を主成分とする岩石で、ごま塩状に黒雲母が散在し、全体としては白みがかかったものが一般的。通称は御影石と言ひ、建築材や産石などの石材として多用される。 (注2)「岩脈」とは、マグマが他の岩石の割れ目に貫入して凝固し、脈状に固まっているもの、この露頭の花崗岩質岩脈は、約9000万年～8000万年前の中生代白亜期後期に形成された。 (注3)「泥質岩」とは、岩石や鉱物のかけらが泥・粘土などの粒となり、堆積して固まったもの。この露頭の泥質岩類からなる堆積岩類は、中生代ジュラ紀(約2億3000万年前～約1億3500万年前)に形成された。 (注4)「ランプロファイヤー」は、輝石・角閃石・黒雲母などの有色鉱物の割合が多い、濃色斑状の半深成岩。		
県	無形民俗文化財	太鼓おどり	たいこおどり		尾道市吉和町	昭40.10.29			隔年の旧7月18日に行うおどりで、吉和から出発して浄土寺にいたり、本堂前でおどる。浄土寺との関係はたまたま神魔退散のため、感謝奉納したのが因縁となったものであろう。 百数十名の大行列で、大宰権以下、太鼓方、小太鼓方、鉦(かね)方、その他御船方、船唄、狂言の各役に分かれているが、太鼓と小太鼓が中心となるためこの名がある。 勇壮活発なおどりで、足利尊氏(あしかがたかうじ)の水軍に加わって戦功があった吉和の漁民が、戦勝祝いにおどたと伝えられているが、確証はない。恐らく元来は念仏おどりであろう。享保3年(1718)の記事や嘉永3年(1850)の古図によってその歴史の古いことが分かる。		
県	無形民俗文化財	みあがりおどり	みあがりおどり		尾道市御調町	昭41.4.28			豊年の予測される旧暦7月17日に、高御調八幡神社に奉納されるおどりで、大太鼓と鉦(かね)のはやしにあわせて踊る。この踊りは古くは「高御調八幡奉納おどり」と言われており、「みあがり」の語源は足利尊氏と結びつけた「都あがり」より、むしろ氏神への踊りを奉納するための「言あがり」と思われ、古くから御調川沿いの各集落に伝えられ、農民の生活に密着したおどりである。おどり方、衣装、はやし方などから見て、豊年おどり、雨乞おどりとともに二・三の風流おどりをあわせたとと思われる。		
県	無形民俗文化財	名荷神楽	みょうががくら		尾道市瀬戸田町	昭43.4.27			名荷神楽は、もとは荒神舞と称して、明治初年までは4年に一度の託宣を伴い荒神社の式年の神楽であった。ところが明治5年(1872)、太政官符により神職が託宣行事に参与することを禁じられたため、神楽から託宣を除き、民間の人々によって十二神祇系神楽として今日まで伝承されてきたものである。 「祭目」のうち、「悪魔退け」「三途荒神寄籠」「御舞」「ぼろ(よ)」「古形(なま)」「なかも」「三途荒神宮籠」は、赤白の紙を着せた人形に神酒を注ぎ、その色にじみ方で神意をうかがうもので託宣神事の一部を伝えるものと思われる。		
県	無形民俗文化財	小味の花おどり	こみのはなおどり		尾道市原田町	昭45.1.30			この踊りは、行基の開基と伝える摩訶衍寺(まかせんじ)の秘仏十一面観音が、33年ごとに開帳される時奉納される踊りである。この花おどりは、花をつけた笠をかむった数十人の踊り子が、かん鼓、鉦(かね)、笛にあわせて踊るものであるが、かつて花笠につける花は、上組は牡丹、下組は桜、小味組は菊と、組によって異なっていたという。 踊りは数多いが、そのなかで「糸屋踊」は太鼓20張を主体とした摩訶衍寺の法要に際して演じられるもの、「雨乞踊」は、寺の上方の竜王を祀った台地で踊られるもので、雨乞のおどりとのおれおどりである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	神楽	かぐら		尾道市御調町	昭46.12.23			この神楽は、「千草舞」「悪魔仏」「三恵比須」「折敷舞」などの舞によって構成されており、畳2枚の広さの中で舞う儘中神楽の古型を多分に残している。 その中で「折敷舞」というのは、神の厭顔に用いる折敷を採物とした舞で、もとは神舞・剣舞・真流舞(ござまい)などと同じ。神楽の最初に舞われる儀式舞の一つであったが、明治初年にこの舞に趣向が加えられ、折敷のかわりに盆や刀身を持ち、それに多数の盆をのせて舞う舞となった。なお、「三恵比須」などの狂言舞は古風な笑いを伝承しているものである。		
県	無形民俗文化財	木ノ庄の鉦太鼓おどり	きのしょうのかねたいこおどり		尾道市木ノ庄町	昭54.3.26			この「おどり」は、大太鼓・大鉦(おおかね)・笛・カウコ等を用いた木ノ庄市原の幣高八幡神社の秋祭に奉納するおどりである。本来は、豊作の予測される夏の夏に五穀豊饒を感謝して八幡神社に奉納する行事であったと思われるが、ち夏の虫送り行事ともなり、更には早天続きの際の雨乞いおどりともなりはては盆ごころに行われるところから地元に関係の深田城主杉原氏の懸置おどりという意味も加えられた。		
県	無形民俗文化財	椋浦の法楽おどり	むくのうらのほうらくおどり		尾道市因島椋浦町	昭56.4.17			尾道市因島の椋浦町金蔵寺に勢揃いした「法楽おどり」の一回は、午後4時ごろ、一本の幡(ばん)を先頭として、町内の良(うしろ)神社に向かって行進する。この時刻は、最後に汐の引いた海岸でおどる時の汐加減のためである。 このおどりの起源は明らかでないが、地元の所伝によれば、中世ごろ因島を中心とした水軍が、出陣の時は椋浦で戦いの勝利と陣士の安全を祈り、帰陣の際は中庄で勝利を祝うとともに戦没者の追悼を行ったというが、その時の行事が法楽おどりの起源であるという。持ちし縫衣に太刀、早駆けの姿勢や跳ぶような動作、六字の名号に大幡などから、水軍に関係のあったことがうかがえる。		
県	無形民俗文化財	中庄神楽	なかのしょうかぐら		尾道市因島中庄町	昭57.2.23			毎年4月15日と10月15日に中庄八幡神社に奉納される神楽である。本神楽団には「昭和3年5月上旬」に宮地左近春光の書写した「神楽台本」が保存されており、記述によれば安政7年(1860)のものだと推定される。 本神楽団はこの台本に記載された演目をすべて上演でき、荒神神楽の古型を保っている点で貴重である。 なお本神楽と同じ「十二神紙」を称するものに豊田郡瀬戸田町の生口島名荷の荒神神楽がある。		
国	登録有形文化財(建造物)	吉原家住宅表長屋門	よしはらけしゅうたくおもてながやもん	1棟	尾道市向島町	平9.7.15	木造平屋建、瓦葺。明治18年(1885)建設	建築面積114㎡	広大な屋敷構えを持つ農家の長屋門形式の表門である。明治時代の建築であるが、文政8年(1825)の家相図により、その時にあった門の規模・形式を継承したものと推定される。向島では類例が少ない長大な規模を持つ表門で、言語関係の記録も残る。		
国	登録有形文化財(建造物)	白滝山荘(旧ファーム住宅)	しらたきさんそう(きゅうふぁあーなむじゅうたく)	1棟	尾道市因島重井町伊浜	平11.10.14	木造一部鉄筋コンクリート造3階建、瓦葺。昭和6年(1931)頃建設	建築面積105㎡	白滝山荘は因島市の北部にある雲山白滝山(標高226.9m。市指定史跡・名勝)の登山口に位置するアメリカ人宣教師の邸宅で、斜面に建ち、1階を鉄筋コンクリート造、2・3階を木造とする。急傾斜屋根にドーマー窓を付けたハーフィンバー・スタイルの洋館で、ウォーリス建築事務所の手による。一端をよく伝えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺山門	こうさんじさんもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	鉄造、間口4.5m		耕三寺境内の北端にあって、伽藍中心軸上に位置する。柱4本を立て、中央に両開、両端に片開の扉を振り、両袖は瓦葺とする。柱、扉ともに鉄製で、白色を基調に随所に丹色を配し、扉にはさまざまな絵柄の装飾を施す。街路に面して境内のランドマークとなる建造物である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺中門	こうさんじちゅうもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造、瓦葺。間口3.6m		四間二戸の二重門で、入母屋造、本瓦葺。法隆寺の西院伽藍の中門を原型とするが、梁間は二間とし、各部比例も異なる。組物等の装飾はおむね原型を踏襲しているが、飾金具、彩色などを多用し、壮麗な外観としている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺羅漢堂	こうさんじらかんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			中門の両側に続く回廊状の建築で、内部に羅漢像を安置する。左右とも桁行17間、梁間1間の規模で、本瓦葺。切妻造とする。外壁面を連子窓、内側を枝扉。小屋は虹梁。杖首組に化粧屋根裏とする。中心伽藍のなかでは最も初期の建築である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鐘樓	こうさんじしやうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			羅漢堂東側背面に建ち、鼓楼と同じ規模形式を持つ。桁行3間、梁間2間、入母屋造、本瓦葺で、白漆喰の榜腰を備える。新薬師寺鐘樓を模したもので、上部に高欄を持たない縁を張り出す。上層内部は中央部を吹き抜けとし、両側に床を張る。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鼓楼	こうさんじこうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積32㎡	羅漢堂西側背面に建ち、鐘樓と対をなす。鐘樓と同規模同形式で、細部裝飾に至るまでほぼ完全に同一である。1階は4半敷の土間とし、上層に高欄を設けない縁を出し、二手先の組物に二軒繁垂木、入母屋造、本瓦葺とする。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺仏宝殿	こうさんじぶつぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積83㎡	一連の伽藍からはやや東寄りに建つ。桁行5間、梁間2間、平入、入母屋造、本瓦葺の宝殿。内部は板敷きで一室とする。耕三寺の建築の中では比較的簡素で、新薬師寺本堂を模したとされるが、規模、各柱間に長押、連子窓を設ける外観など大きく異なる点が多い。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺法宝殿	こうさんじほうぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積180㎡	伽藍中央に建つ宝物館で、僧宝殿と対をなす。桁行4間、梁間3間の身舎四間に裳階を廻らす。屋根は入母屋造、本瓦の葺きとする。四天王寺金堂を模したといわれるが、法宝殿は妻入であり、屋根勾配、各部比例なども大きく異なる。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺僧宝殿	こうさんじそうぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積180㎡	伽藍中段東側に建ち、同型同規模の法宝殿と五重塔をはさんで対をなす。四天王寺金堂を参照しつつ大きく外観を変え、身舎は円柱に二手先、裳階は角柱に平三斗とし、内部は折上格天井の大空間とする。昭和前期における大規模木造寺院建築の好例である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺至心殿	こうさんじしんてん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積114㎡	伽藍最上段西側に建ち、信楽殿と対をなす。法界寺阿弥陀堂を模したと伝えられ、5間四方の身舎に吹き放しの裳階を設け、屋根は宝形造、銅板葺。組物は平三斗で、裳階の正面中央部のみ一段高く屋根を設ける。内部は一室とし、各種用途に活用されている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺信楽殿	こうさんじしんぎやうてん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積104㎡	伽藍最上段の東側に建つ。至心殿とは対をなし、同規模同形式とするが、平面などに若干の違いがある。身舎柱は円柱。裳階柱は角柱で、講堂として用いられる身舎内部は一室とし、天井は折上小組格天井。四周外壁は筋戸を見せるが、内部には壁が設けられている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺本堂	こうさんじほんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積271㎡	中堂、左右翼廊、尾廊からなる堂宇。いずれも本瓦葺とし、軸部、壁面、建具に至るまで極彩色を施し、飾金具を用いる。平等院鳳凰堂を模しているが、軸部においては異なる点も多く、内部外部とも仕麗さを増しており、耕三寺の中核建築として知られている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺多宝塔	こうさんじたぼうとう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造多宝塔、銅板葺	建築面積25㎡	本堂西方に建つ。石山寺多宝塔を模しており、下層は方3間の周囲に縁を廻らし、上層は円形平面で二手先組物で二軒繁垂木の軒を支え、屋根は上層下層とも銅板葺とする。比較的原作に忠実であり、組物等に彩色を施した外観は壮麗である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺八角円堂	こうさんじはつかくえんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積71㎡	本堂を挟んで多宝塔と対置される。正八角形平面を持ち、屋根は宝形造、本瓦葺。法隆寺夢殿を模しているが、規模を縮小している。柱は八角柱で、組物は隅部出三斗、中備は平三斗、内部は板敷で、中央は鏡天井、周囲を栴天井とする。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺銀龍閣	こうさんじぎんりゅうかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積40㎡	境内南東方の庭園池泉に張り出して建つ。八畳大の板間の三方に縁を廻らし、東側に床と小室を設ける。屋根は宝形造の銅板葺。板間は鏡天井として縁の縁を描き、軸部はすべて銀色とする。板間の障子に花頭窓を設ける点も特徴的で、特異な意匠の建築である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺潮聲閣	こうさんじちうせいかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造及び鉄筋コンクリート造平屋一部2階建、瓦葺、車寄付	建築面積389㎡	境内東北隅に建つ住宅建築。ポーラを持つRC2階建の洋館と、唐破風の玄関を持つ木造平屋建の和館からなり、洋館、和館玄関、老人室など各所に意匠を凝らす。洋館と和館を並立させる昭和初期の大規模住宅建築の特徴をよく伝える。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	久山田貯水池堰堤	ひさやまだちよすいちえんてい	1基	尾道市久山田町	平16.11.29	粗石モルタル積表面張石造 堤長750m 堤高22m 有効貯水量754,000?		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。市南西部を流れる門田川に建設された。中央に越流部を設けた堤長75m、堤高22mの石張コンクリート造堰堤で、堤体右岸寄りに半円状の取水塔を張り出す。平面形状は副堰堤との同心の円弧とし、重力式とアーチ式を複合した構造形式が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場着水井	ながえじょうすいじょうちやくすいせい	1井	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 長方形 面積5.0㎡ 内法長さ4.2m 幅1.2m 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。横ヶ峠の頂を約12m掘り下げて築かれた尾道市創設水道の浄水池施設の一つ。水源地より自然落下により導水された原水を受ける施設で、鉄筋コンクリート造隔壁で内部を区切り、天端には花崗岩を配す。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場緩速ろ過池	ながえじょうすいじょうかんそくろかち	4池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 扇形454㎡ 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。着水井から導かれた水をろ過処理するための施設。外半径4.8m、内半径2.4m、中心角120°で、内部を隔壁により4等分とした扇形平面の鉄筋コンクリート造構造物で天端には花崗岩を配す。狭小地を巧みに利用した類例の少ない平面形状が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場配水池	ながえじょうすいじょうはいすいち	1池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 鉄筋コンクリート造り上層計置室 内径27.0m 深さ3.0m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。ろ過池と同心の半径14mの円形鉄筋コンクリート構造物で内部は中央隔壁で2分される。池中心部の円井で減菌水が注入されたろ過水。円形2象の導流壁に沿って蛇行させることで攪拌作用を高める。円井上方にはアルデコ風の平面12角形の上層を設ける。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅主屋	きゅうふくいけしゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)しゅおく	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積210㎡	尾道水道に臨む斜面に南面して建ち、寄棟造の東棟が大正元年、入母屋造の西棟が昭和2年築で、ほぼ中央の玄関を挟んで巧みに連続する。木造平屋建、棧瓦葺で、檜を中心に檜や鉄刀木(たがやさん)などの銘木を多用した上質な造りになり、瀟洒な数寄屋風の意匠でまとめている。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅茶室	きゅうふくいけしゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)ちやしつ	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積28㎡	昭和3年築。主屋西棟の北西部に連結しており、尾道の近代における茶室趣味の有様の一端を物語る。規模は小さいが、木造平屋建、棧瓦葺で、4畳半茶室に廊下を挟んで控えの間が付属した形式になっている。主屋と同じく良材を持ち、洗練された丁寧な造りである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅蔵	きゅうふくいけいじゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)くら	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	土蔵造2階建、瓦葺	建築面積25㎡	土蔵造2階建。南北棟の切妻造。妻入で、蔵前が主屋西棟の北側に連続している。規模は桁行6m、梁間4m、屋根は桧瓦葺。外壁は漆喰塗で、1・2階境に乾腹風の段をつけて水切り瓦を懸す。2階妻面には小庇付の窓を設ける。主屋と一連の丁寧な造りになる。建築時期は主屋東棟とほぼ同時期の大正元年ごろと考えられる。		
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家主屋	たけむらやしゅおく	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造2階建、瓦葺	建築面積481㎡	大正9年築。木造2階建、桧瓦葺で、北が道路、南が海に面している。全体は南北棟の北側と東西棟の南側が直交したT字型の形態で、竹材の細工や造作を多用した繊細な書院造である。北正面は棟違いの八棟造風に換うなど、外観は重厚かつ豪放で、地域景観の様になっている。		
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家門及び塀	たけむらやもんおよびへい	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造、瓦葺、間口2.4m、塀延長20.0m		大正9年築。門は北辺西寄りに設けられた切妻造。銅板葺の棟門で、簡素な袖掛がつく。これに続く塀は、真壁造、桧瓦葺で、腰から上を黒漆喰塗とし、簾を入れた横長の小窓を開け、重厚さと繊細さを併せ持つ。敷地の北辺と西辺を区画しつつ、街路景観を整えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場ベンチユール上屋	ながえしじょうすいじょうベンチユールわや	1棟	尾道市長江三丁目	平23.1.26	鉄筋コンクリート造平屋建、切妻造、建築面積99㎡		尾道市街の丘陵上にある浄水場南端に建つ。桁行2.6m、梁間2.6m、鉄筋コンクリート造、切妻造妻入で、正面出入口に切妻屋根の庇を付ける。軒下や妻面に縦型風の持送りや付けるなど、木造洋風建築を鉄筋コンクリート造で表現した上屋である。大正14年建設。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧高橋家住宅主屋	きゅうたかはしけいじゅうたくおもや	1棟	尾道市日比崎町	平23.7.25	木造2階建、瓦葺、建築面積230㎡		栗原川沿いの敷地中央に東面して建つ。桁行18m梁間13m、木造二階建、入母屋造桧瓦葺で、南東隅に応接間と玄関を張り出す。周囲を開放的に造り、屋根は入母屋破風を複合せ、応接間に洋風意匠を採用するなど、変化のある外観になる大型住宅である。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧和泉家別邸	きゅういづみけつてい	1棟	尾道市三軒家町	H25.12.24			千光寺山南西斜面の石垣上に立つ小住宅。木造2階建てで下見板張の和館の南にモルタル塗の洋館を接続する。変形の敷地を巧みに利用しており、2階8畳座敷や階段の造作も丁寧である。入母屋屋根に切妻破風や小庇、露台をつけ、変化に富んだ屋根構成を見せる。		
国	登録有形文化財(建造物)	みはらし亭	みはらしてい	1棟	尾道市東土堂町	H25.12.24			千光寺山東方斜面の参道に面する木造2階建、高い石垣の上に建ち、東面に縁を設けて尾道水道の眺望を得る。2階北端に2畳の主座敷を設け、南端の室は敷地形状により上下階とも変形平面を呈する。屋根は入母屋造桧瓦葺で、軒は丸木の化粧垂木を隅隅に配る。		
国	登録有形文化財(建造物)	西山本館	にしやまほんかん	1棟	尾道市十四日元町	H27.3.26			旧出雲街道に面して建つ現役の旅館。木造二階建てと三階建ての様が複雑に組み合わされ、全ての客室が庭に面するよう工夫されている。丁寧な仕上げの数寄屋(すずみや)風の和室のほか、かつて外国人船員の宿泊にも対応して洋室三室を持つなど、港町の風情を醸す木造旅館建築。		
国	登録有形文化財(建造物)	多門亭	たもんてい	1棟	尾道市東土堂町	平31.3.29	木造2階建、瓦葺	建築面積125㎡	千光寺山南麓にある旧料亭。切妻造の総二階建てで上下階に各玄関を設け、一階に中廊下を通して小座敷を並べ、二階に大座敷を配る。山麓に広がる市街地の歴史的景観の構成要素である。		大正9年頃/昭和40年頃改修

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	向酒店舗兼主屋	むかいさけてんぼけんおもや	1棟	尾道市久保一丁目	令2.4.3	木造二階建、瓦葺	建築面積77㎡	向酒店舗兼主屋は尾道市街地に建つ店舗兼住宅。大屋根は椽瓦葺だが、一階正面の庇(ひさし)を本瓦葺として重厚に見せる。二階の建ちは高く、近代の町家の特徴を持っている。		大正14年頃
国	登録有形文化財(建造物)	旧尾道市役所百島支所庁舎	きゅうおのみちしやくしよもしまししよらうしや	1棟	尾道市百島町	令4.10.31	木造2階建、鉄板葺	建築面積251㎡	百島北東部にある役場庁舎。木造二階建、半切妻造で、縦長窓を基調に洋風とし、正面頂部ガラス二階の四連窓が特徴的。二階はキングポストトラスで大広間とし、一階カウンター付事務室が住時を伝える。現在、ゲストハウスとイベントスペースとして活用。		昭和29年/令和元年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井醫院診療棟	きゅうむらいいんしんりやうとう	1棟	尾道市御調町	令5.8.7	木造平屋建、椽瓦葺	建築面積89㎡	山陽道と出雲道が交わる御調(みつぎ)の町にある洋風の医院建築。診療棟は、寄棟造り椽瓦葺きで、外壁は下見板張と定規柱風に珞珞塗り仕上げとする。ペディメント付きの上げ下げ窓と石柱の門が街道沿いの歴史的景観を形成する。		大正7年/昭和中期・平成24年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井醫院門柱	きゅうむらいいんもんちゆう	1基	尾道市御調町	令5.8.7	石造、石槽付	間口1.9m			大正7年頃/昭和中期改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧宮地醤油店離れ(林英美子旧居)	きゅうみやぢしやうゆてんはなれ(はやしふみこきやうきよ)	1棟	尾道市土堂一丁目	令5.8.7	木造二階建、鉄板葺	建築面積12㎡	尾道駅に程近い商店街にある醤油店の付属建物。短冊形敷地背面側に建ち、離れや醤油蔵、一時貸家とし、当地では東風を避けて二階裏面は壁として妻側に窓を設けるが、その特徴を持つ。大正6年頃には小説家林英美子が入居しており、現在、資料館として活用。		明治中期/昭和51年頃改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧小野産婦人科医院	きゅうおのざんぷじんかいいん	1棟	尾道市十四日元町	※未告示	木造三階建、鉄板葺	建築面積100㎡	尾道の中心部に位置する旧産婦人科医院。隅切した角地に建つ木造三階建てで、庇や付柱など直線的構成で角地を強調した外観が印象的な医院建築。現在は店舗等として活用。		(令和6年11月22日登録答申)
国	登録有形文化財(建造物)	旧小林家住宅主屋	きゅうこばやしけじやうたくおもや	1棟	尾道市長江	※未告示	木造二階建、瓦葺	建築面積172㎡	長江通り東側の石垣上に建ち、洋画家小林和作(わさく)が晩年まで居住した主屋。二階はアトリエとして用い、西面に掃出窓を開けた眺望優れた主屋。現在は小林和作の遺品展示や交流施設として活用。		(令和6年11月22日登録答申)
国	登録有形文化財(記念物)	瓢箪島	ひょうたんじま		尾道市瀬戸田町 愛媛県今治市上浦町	平25.3.27		8,958平方メートル(全島17,576平方メートル)	瓢箪島は瀬戸内海に浮かぶ瓢箪の形をした無人島で、広島県尾道市の生口島(いくじま)と愛媛県今治市の大三島(おみしま)との中間に位置する。島の周囲は約700メートルあり、景観が横切る瓢箪形のくびれ部を挟んで、広島県側の最高所は標高234メートル、愛媛県側の最高所は標高352メートルである。 昔、生口島の神と大三島の神が島取りを目的として綱引きを行ったため、くびれてしまった島の形を双方の島民が心配して和解することになったという民話が伝えられている。島の周辺海域は良好な漁場であることから、その漁業権をめぐる紛争に端を発して生まれた民話であろうと考えられており、多発した境界争いの証拠として、島内には明治時代の境界石も残されている。また、瓢箪形の小島を誇らしく上げた舟歌も伝えられており、島の風致景観は漁師たちの間でもてはやされて来たことが知られる。 瓢箪島は、昭和39年に放映が開始されたNHKのテレビ人形劇『ひょうたん島』のモデルとなったとされる島の一つとしても著名である。再現することが容易でない名勝地として意義深い。		